

---

# サヨナラ ...永遠の約束...

グラキエース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サヨナラ … 永遠の約束…

### 【Nコード】

N2650E

### 【作者名】

グラキエース

### 【あらすじ】

その眼で見届けよ…虚しい宿命と過去を背負う者達の結末を…。  
前回投稿した『ただいま…友の涙…』の続編です。オールキャラネスVSウインド（ミュウツー）中心

## S c e n e 0 - I n t r o d u c t o r y c h a p t e r - (前書き)

初めに…

この小説には作者の妄想文・設定、ややキャラ壊し、グロテスク・死ネタの表現が含まれています！（年齢制限としたら17以上は必要かもしれません。）

上記の中で一つでも該当あったら直ぐにご退場ください。

私の投稿小説を見て大丈夫平気だよ！という方はどうぞ。

なお、苦情は一切受け付けません。自己責任で閲覧をお願いいたします。

# Scene 0 - Introductory chapter -

...

...

...

私は...

...もう...

...長くない...

...

...

この体が...

...砂のように

...

...舞い散るまでの...

...時間が...

...

…迫って

来ていることを…

…

…

ああ…せめて…

…せめて、…

…この体が…

…

…消えてしまふのならば…

…

私は…一つの…

…行動を…

…起こすまでだ。…

例え…元の仲間達が…

…牙を向いても…

そして…

我が主<sup>ネス</sup>を怒らせ…泣かせたとしても…

とても哀しくて…切ない物語がまた…

開幕…する。

## Scene 1 Daily lives of people who fi

少し亜空のネタバレとMOTHERシリーズの技とスマブラファンから生まれたネタが少し含まれています。未プレイの方はご注意ください。

グロの部分は多分…ないと思うのでごゆっくり閲覧どうぞ！

# Scene 1 Daily lives of people who fi

何時もながらの彼らの戦い…

互いに競い合い・互いに混じり合うことで

絆がより深く高められる。

そんな彼らの日常をその眼で刻め…。

…スマッシュワールド スマブラスタジアム ステージ終点…

ワアアアアアアアアアア！！！！

ガキンツ！ギイイン！カキイイン！！

アイク「フツ！ハア！！てい！！！！」

ネス「ha! ya!! yee ar!!!」

いろんな世界から来た多くの観客が魅了と盛り上がる声援でヒートアップする中、中央に浮いているステージから観客席まで響き渡る金属の音：ネスの持つバットとアイクの持つラグネルが高速に打ち合って火花が飛び散りながらも二人は舞うように戦っていた。

ネス「PK Flash !!」(PKフラッシュ !!)」



ボオオン！！

頭に赤い帽子を青と黄色のボーダー服を靡かせ長いGジャンと赤いスポーツ靴を着た超能力青年「ネス」の両手から放たれた大きい緑色の光が、額に巻いている紺色の鉢巻と紺色の鎧を着て紺色のマントを靡かせる剛腕剣士「アイク」の身体に向けて放たれ爆発するが…

アイク「甘い！」

ババツ！

低空中緊急回避（絶に近い）でステージを滑りながらアイクは完全回避する。

アイク「そおりやああ！！！！！」

ステージを滑りながら剣先に最大集中した炎をネスの足元に向けて突き刺す。

ドウンツ！

ネス「ッ」

ネスは口笛を吹きながら軽くジャンプして避け、ネスの足の先端に集中したPSIをサッカー選手のように素早くアイクの腹に向けて蹴りを放った。（PKエアフロントキック）

ビュオツ！ガツ！！

アイク「ふんっ！」

ガシッ

アイクは瞬時に外腕受けてネスの蹴りを逸らし更にネスの足を掴んで、ネスは「oh!shit!」と言いながら思い切りネスの身体をステージに叩きつけた。

ガッ

ネス「う…ぐっ…oh!…」

アイク「喰らえ！」

ブォン！

アイクの持つ炎を宿す大剣…ラグネルが、倒れているネスにむけて一刀両断如く振り下ろすが、ネスはソレを避けようとせず、右手に白い発光を出しながら前へと伸ばす。

カキンッ！

ネス「oh…It shall not be a dangerous fellow.（おっと、危ないな。）」

ネスはスマブラメンバーでも破ることすら難しいPKシールドを使い、雪の結晶の形と似た壁が出来てアイクの斬撃を完全に防いだと見ている観客・控えている選手は思ったが…

ピシッ…

アイク「今日は…朝、肉をたっぷりと食ってきたからな。俺の力は、  
此れまでに無いほど…最高潮なんだ！」

ミシッ…

ネス「Han?」

シールドにヒビが入り、ネスはやや呆れた表情のまま徐々にシールドにヒビが広がっていくのを見つめていた。

ネス「It strengthens so much by  
extending in which it eats bacon?  
: It shall not be an amusing fe  
llow. (ベーコンを食べた程度でこんなに強くなるの?…まっ  
たく、可笑しい奴だな。)」

アイク「??…何を言っているのか分からないが…どんなに不思議  
壁を張ろうが…」

バキヤアアア!

シールドが破壊されシールドの破片が時が遅くなったかのように粉  
雪のようにネスの身体を逸れるようにふりそそぐ。そしてシールド  
の破片が舞う中アイクが持つラグネルの剣先が正確にゆっくりとネ  
スの首の中心、咽喉仏に向けて突き刺していく。

アイク「俺の前では、役には立たん。」

ネス「Please do not approach me t

he remainder of the serious look.  
(真顔のまま俺に近寄るなつて。(汗))

アイクの持つラグネルの剣先がネスの咽喉仏にあと数ミリ突き刺さる寸前:

ブウン...ガシッ!!

電子音のような音が鳴り、ネスの体が一瞬の内に消えて違う場所に立っていた。どうやらネスは瞬時にPKレポートを使って後方へと退避し、アイクの渾身の斬撃を逃れたらしい。その直後:

ボンッ!

爆発音が鳴りネスはもう一度自分が居た位置に視線を向けると、機械で出来た土台の一部が焼け解けて、墨になったコードが散乱していた。

ネス「Your thermal power is too strong... (火力強すぎだろ...)」

アイク「いくぞ」

ザンッ!

アイクは地を蹴ってラグネルの力強い横薙ぎの一撃がネスの腹部を正確に狙い斬りかかる。

ネス「Ha!」

タン！…ヒュオオツ！

ネスは襲い掛かる一撃を両足に力を込めて蹴り、全身に白い発光を包まれながら高速に上昇しスタジアムを見下ろす位置まで飛んだ。

ネス「If it is in the air, your attack is limit…? What…is this?  
(空中ならアンタの攻撃は制限あるだ…ん？…何んだ…コレ？)」

ブオン…ブオン…

目の前に剣が<sup>ラグネル</sup>回っている。何故空中に剣があるのかは次の行動で理解できるのを時間は掛からなかった。

アイク「大つつつつ！天つつ！！空う！！！」

ネス「(マジか！?)」

ブオンツ！

目の前には地上にいるはずのアイクが…それに全身金色のオーラがかかっている…。瞳は黄金色に光らせ両手には剣を今でも振り下そう如く構えていた。

どうやらアイクは地上に出現したスマッシュボールを手にとってすぐに発動させ、空中にいるネスに向けてラグネルを投げ付けて、超人的の跳躍力で空中回転しながらラグネルを手に取り、力任せでネスの頭部に目掛けて振り下ろした。

ネス「！！！！っPK Shield！（ヤバイ！PKシールド

！」

カキイイイン…

ネスは両手を前に伸ばし破られたシールドよりも強い輝き・耐久力を持つ薄い虹色の円形シールドを全身に張ってアイクの最後の切り札をネス自身の強い精神力で防ぎきろうとするが…

キシイイ…

ネス「っ！？」

体が少し下へと下がっていく感覚を覚え

アイク「守りだけでは…どうにもならんぞ！それに…」

ネス「oh！？」

ギシッ…

アイクは不適に微笑しながら更に力を込めてラグネルを握りなおし、ネスが張っているシールドを深く押し込む。ネスはアイクの表情を見てやや青ざめシールドの維持を保つように心の中で集中しながらアイクを見つめていた。

アイク「実際に一回、かつて俺達の敵だったエインシャイント卿（本当はロボット）の頑丈な亜空爆弾を俺一人だけ断ち斬ったからな！」

ガシャアアアンッ！

アイクの最後の一撃がネスが張っていたPKシールドをぶち破り、  
ネスの身体にラグネルの炎が襲いかかる。

ネス「（っチイ！とんでもない奴だ！PKシールドを破るなんて  
！！）」

ネスは腕をクロスさせて腕の所々が火傷になりながらもある程度  
の被害を抑えたかにみえたが…

ブシッ！

ネス「があ！？」

突然アイクの攻撃範囲から逃れているハズのネスが、左肩から右脇  
腹まで斜め一直線にボーダー服ごと切り裂かれ赤い鮮血が出る。ど  
うやらアイクの切り札の最後の―撃で発生した剣圧で、ネスの位置  
とかも関係なく切り裂いたようだ。

アイク「ネス、腹筋が足りないぞ。もっと俺のように肉を食べば一  
つや二つ付けれたのに。」

ネス「（肉食えば直ぐに筋肉付くわけねーだろが（汗）」

アイクの言葉を聞いてネスは心の中で突っ込みながら、体は真下へ  
と急降下されてしまい、観客達が「きゃあああ！」「うわあああ！  
！」と固いステージの土俵に近づく度に段々と大きく悲鳴をあげた。

ネス「You are a brute force etc.（  
馬鹿力め…）」

グウン！

ネスの体が硬い機械の土台に叩きつけられる前、全身体に力を入れて手を広げながら「ハアッ！」と言って空中で踏ん張る仕草を取った。すると…

オオオ…

地面スレスレの所でネスの体が止まりそれを見ていた観客達は「おおー！」「わああ！！」と安堵する。

アイク「ほお…せええいいいや！」

ギョルルルル！！！！

アイクは少し口元を吊り上げた後体を回転させて剣を下に構えながら、真下にいるネスに向けて高速に急降下する。

ネス「W o o p s！（おっと！）」

バガンツ！！…

ネスはすぐさま低空飛行でアイクの追撃を回避した直後…

ドオオオオオン！！

何かに引火したのか先ほどまでネスが居た位置に爆発が起きて黒い噴煙が溢れ出る。



ドッ…

ネス「oh!…f…fuck!!」

飛び散る機械の破片の一部が背中当たりネスはやや呻きながら、まだ破損していない機械の土台に降り立つ。

ズキッ…

ネス「っく。（傷は幸い浅い…けどめちやくちや痛いな（泣））

」

アイクの剣圧で開いた傷口が痛み出し、ネスは少しよろけたものの不屈の精神力で立て直し傷口に右手で押えたまま、噴煙をキリつとした表情で見つめなおす。

アイク「流石：体が傷ついても気にせず屈することもないずば抜けた精神力：マルスから聞いたが、お前は歴戦の戦士の中で随一：子供戦士達を束ねる男と言われているな。：俺はそんな奴と戦って楽しい気分だ。」

シュウウウ…

ネス「…Do you like fight?（…戦いが好きなのかい？）The struggle mind seems to have gone out extraordinaryilly when your expression is seen. …（アンタの顔を見ると、とてつもねえ闘争心がわんさかとお出ているようだな…。）」

黒い噴煙がステージを覆いつくしても、アイクはやや不適に微笑しながらラグネルの剣先を手前に立っているネスの体に向けて構える。

アイク「本気で来いネス。まだまだ戦いは始まったばかりだ！」

シャキン…

刃の音が静かに鳴り、アイクが持つラグネルの刀身にネスの体が映る。ネスはため息を付きやや乱れた赤い帽子を被り直した後…

ネス「…Seriousness?…It really good? You may really put it out?」  
「本気?…いいの?本当に出してもいいんだね?」

ニヤリ…アイクの挑発を聞いて、ネスは真顔から段々といたずらっぱい（腹黒い）表情へと変わっていく。

ネス「OK…Do not determine it.」（OK…覚悟するんだな。）

ネスは両手・両足に集中したPSIを静かに光らせて、焼き切れたボイダー服を自然に発生する風で煽られながら、黒い笑みでアイクの元へと走って行った。

It Show time !!

…スマブラスタジアム 一階 選手受付ホール…

リュカ「あーあ、アイクさん…（汗）」

マルス「終わったね（笑）」

ザアアアアア…

選手受付ホールにいた金髪超能力少年またはネスの弟子「リュカ」と神剣を携え異世界の一国の若き王子「マルス」がモニターに映るネスの不気味な表情を見て同時に言った時、突然モニターの画面が乱れて、荒々しい雑音だけになって映らなくなった。

カービィ「僕らも早く行こう！」

トゥーンリンク（通称トゥン）「ネス兄いの試合が終わっちゃう！  
！」

ピンクの球体の生き物「カービィ」と一頭身猫目ねぼ助緑の服を着た勇者「トゥーンリンク（通称トゥン）」がはしゃぎながらホールを出て、観客席に走り去っていく。

リュカ「アイクさん…大丈夫かな？」

マルス「無理だろ。多分、もう死んでいるだろうね（黒）」

マルスの真つ黒コメントを聞いた時、リュカはやや身振るいしながら、ホールにいたマルスとリュカもカービィ達の後を追うように観客席へと向かった。

…スマブラスタジアム 終点ステージ…

ネス「PK Hand stamp! PK Hand stamp!! Needle kick! Head in the air bat! Kick in the air”PSI”!  
! and…(PKハンドスタンプ! PKハンドスタンプ!! ニー  
ドルキック! 空中ヘッドバッド! 空中PSIキック!! そしてえ…)

ㄥ

バチチ! バチチ! ドス! ドガツ! バチィツ!

アイク「ウゴツ! ボゴォ! ブバアア! ???!! (なんじゃこりゃあ  
あ! ? カウンターすら発動できなねえ! ???! ハガツ! グハア! !)

ㄥ

ネスのPSIと独自に身に付けた激しい格闘技で、アイクの顔が酷  
いぐらいに晴れ上がっていき、体がPSIの影響なのだろうか、段  
々と黒くなっていく。

ネス「SUMAAAAASH!」

バキッ!

ネスは更にPSIが宿った会心の回し蹴りでアイクを上へと蹴り上  
げた後…腹黒い笑みで両手に雪の結晶の形がした青白い光を生成し

た後、アイクに向け放った。

ネス「P K F r e e z ！！（P Kフリーズ ！！）」

パッキイイン。

あっという間にアイクの体が凍りついて、凍結になったアイクが高速に空中へと舞う。ネスは追撃を試みようとする足数を数歩動かした時…

カランツ…

ネス「o h！…」

足元に乾いた音が鳴って音がした方向に顔を向けると、乱闘用アイテム…ホームランバットが転がっていて、ネスはすぐにホームランバットを拾って両手に構える。

ひゅるるるっ

アイクがステージに落ちてくるタイミングを図って、思いっきりスイングした。

ネス「H o m e r u n o f v i c t o r y！（勝利のホームラン！）」

カキーンッ！

凍結したアイクにバットの先端にクリーンヒットし、良い音を立てながら場外へと吹き飛んでいった。

カンッ！……

観客席に張ってあったバリアの音が響き凍結したアイクを弾いて、クルクルと回りながらステージ階下にあるマットへ…

ドオオオオン！

撃墜の音を出しながら落ちていった。

アナウンス『game set！ Winner of Ness  
！！』

ワアアアアア！！！！

放送席から出る試合終了の掛け声で観客全体が、歓喜と怒号で大きく揺るがした。

ネス「The End！…It was IKE， and a  
quite happy game！（おしまい！アイク、なかなか  
いい試合だったぜ！）」

ネスはそつと呟いて目を閉じゆっくりと目を開けた後、蒼い浄眼から元の黒い瞳に戻って頭部に被っていた帽子を取って、周りの観客全員にアピールをした。（下アピール）

ネス「Han！俺の勝ち…だね」

ウオオオオオオオ！！！！

自慢のPSIのパフォーマンスを観客に見せた後観客席の傍にある

小さい選手控え室に入ってイスに座って傷口の部分に右手を当てて静かに呟いた。

ネス「Life up（ライフアップ）」

キイイイン…

右手に集中した緑色の光がなぞる様に動かす度に、傷つけられた体の部分と火傷も消えていった。

ネス「（あーあ折角ピーチが買ってきてくれたこの服を台無しにしてしまったよ…。後で説教を受けるなこりゃ…）」

観客が更に盛り上がる最中、選手控え室入り口からカービィとトゥンが駆け寄ってきた。

カービィ「ネスティー！」

トゥン「ネス兄いー！」

ネス「ん？カービィに…トゥン??」

更に遅れて控え室入り口からリュカとマルスが駆け寄ってきた。

リュカ「先輩凄いです！僕の技が使えるなんて…」

マルス「派手に戦ったねえ…まあそれでも、まさに撲殺天使だったよ。流石は…僕が憧れているかわい「腐れ王子だけじゃねあんだよ！カスガー！！（怒）」」

バババババ！！！！

カービィの怒りを込めたバルカンジャブがマルスに向けて放たれたが  
マルス「こらこらピンクボール君。僕達の試合が始まっていないの  
に攻撃しちゃ駄目じゃないか」アハハハ」

ヒュヒュヒュヒュヒュヒュ！

マルスはニコニコ笑顔のままで分身の術でもやったかのように難な  
く回避する。なぜこんなに早いのかは次のマルスの行動に移る際に  
分かるようになった。

ピョイン！

カービィ「げっ……（汗）」

マルス「手際良いだろう？どんな状況にさえスグに対応・行動でき  
るように準備しなくちゃいけないからね。」

いつの間にか使っていたのか……マルスの頭部に乱闘用の『ウサギ頭  
巾』が付いていて更に左手に『リップステッキ』を持ちながらカー  
ビィの頭部に向けて花杖を振るう。  
リップステッキ

マルス「少しは……落・ち・着・き・た・ま・え」

パコンッ

カービィ「うみゅー！」



カービィは頭部に大きな花を植えつけられながら、試合ステージへと吹き飛ぶ。マルスはステージへと吹き飛んだカービィを見た後、危ない空気を読んでいないネスに向かって寄りかかる。

ネス「いつのまに…。」

マルス「日常でも何が起こるか分からないからね。ネス君も何かしら準備したほうがいいじゃないかな？」

ササッ！

どこから取り出したのかわからないが、マルスはしっかりと畳んだ蒼いジャケットを出して、焼け切れたボロボロのボードー服を脱がし新品のジャケットに着せ変えた。

もちろん、うさぎ頭巾とリップステッキを装備したままである。

リュカ「うつわ…キツモ！！こんなにキモい王子なんて…始めて見まし…」

その光景を見ていたリュカが、さぶいぼを出しつつ思わず本音を言いかけた時…

マルス「何か言ったかい？金髪腹黒泣き虫少年君？？」

スルッ…

リュカがの続きを遮るかのように、いつの間にかリュカの背後に回ったマルスが何時抜いたのか…神剣『ファルシオン』の刀身がリュカの首元に押さえられていた。

マルス「今この場で首をちょん切るつもりだったんだけど」

バシユツ…

いつのまにかマルスの首元に白い光が宿った木の棒が抑えられており、マルスは苦笑いしながら武器を押さえつけられているリュカに黒い笑みを送った。

マルス「腕を上げたね…金髪腹黒泣き虫少年君」

リュカ「先輩と毎・日鍛えていますから…このぐらい出来ないといけません…でしょう、腹黒鬼畜策士サディストS王子…マルスさん？…Speech and behavior that it and a little while ago is extr a…From it…Aren't you foolish h?（それと、さっきの言動は余計です。…それよりも…アンタ馬鹿じゃねえの?）」

フンという表情を出すリュカに対して、マルスは黒いオーラが出しつつ笑顔のままリュカに向けてこう言った。

マルス「?…何を言っているのかな、金髪腹黒泣き虫少年君?…突然僕の知らない異国語を使わないでくれたまえ。（黒笑）」

リュカ「…Moreover, use. It is a fellow who doesn't like it by coming to wanting kill really!（…また使いやがったな。本当に殺したくなるほど気にいらねえヤロウだぜ!）（ド黒）」

ゴゴゴゴ...

二人は微笑み背中合わせながらもドス黒いオーラが出ていて、更に漫画のような結界でも張られたかのようにマルスとリュカがいる場所に一般人・並の選手でも入れないくらいにとてつもなく寒い・寄れない・恐怖のブリザード現象が起きていた。

ネス「あ...あの...マルス...リュカ...」（汗）」

マルス「何だいネス君？（笑顔）」

リュカ「Oh!...どうしました先輩??（笑顔）」

ピピピピ...

突如危ない雰囲気を感じて戸惑う表情を出すネスが破った時、二人はあのドス黒い表情から乱闘が無い日常の表情へと瞬時に代わって、先ほどのブリザード現象からお花畑と黄色い雛が溢れるニコニコ全快の世界へと変わっていた。

ネス「し...」

マルス・リュカ「し?」

ネスがステージ側に指先を向けると...

ネス「試合に参加していないから...アンタら強制的に最下位ビリだよ（汗）」

ワアアアアア！！！！

既に第二試合が始まっていて、新しいステージに居るカービィとトウンが乱闘していた。つまり、制限時間内にステージに入っていなかったためマルスとリュカは強制退場になり、最下位<sup>ビリ</sup>の実績を負うことになったのだ。

マルス・リュカ「し…しまったあああああ！！！！」

二人はムンクの叫びのように表情が蒼白になって、お互いの背中にカービィの10tストーンでも乗せられたかのようにとてつもなく落ち込んだ。(orz この状態)

ネス「(まったく…こいつらは…)」

ネスはややため息付いた後、片手に頭を抑えるかのようなポーズで今だに落ち込んでいる二人を見つめていた。

t o b e c o n t i n u e s . . .

S c e n e 1   D a i l y   l i v e s   o f   p e o p l e   w h o   f i n

使えない技を何で使っているんだよ！

というツッコミは一切しないでください。

次回から少しずつシリアス・ダークにへとなっていきます。

## **S c e n e 2   P a s t   a f t e r i m a g e (前書き)**

オリジナル人物が出てきます。ややホラーな要素・キャラ壊しが含まれているので閲覧にご注意ください。

## Scene 2 Past after image

誰もが心の奥に閉っている過去の産物から

唐突に掘り起こされる…

惨劇の映像  
デジャブ

その映像は決して消えることはできないのだ…。

ピンポンパンポン

アナウンス『今日の乱闘は終了いたします。最後まで観戦してくれたお客様！ありがとうございます！！またの機会をお待ちしております！！』

夕方になると乱闘は終了し、アナウンスが鳴り響く。見に来ていた観客達はスタジアムから出てすま村の入り口にあるトリップゲート（要はワープ装置）を使い様々な世界へと帰っていく。

そんな中一つの世界である団体がマスターの予約で設備が新しい広い部屋：交流ホールにて待機しており誰かを待っていた。

…夕方 スマブラスタジアム 一階 選手交流ホール…

？「お待たせしました英の国の諸君！それでは選手と交流をまったりと楽しんでくれよ！！」

団体の皆様「ハアアイ！！」

バタンッ！

宙に浮く白い手袋…スマブラオーナー『マスターハンド』がテンション高く言った時、入り口の扉からニコニコ笑顔が出ているマリオ達が入ってくる。

子供E「本物だ…マリオだ！ルイージだああ！！すげええええ！！！！」

大人A「俺…ヨッシーの背中に乗ってみたかったんだ！」

子供S「本物だあ！ゼルダだあ！リンクだあ！サインしないと！！」

大人B「か…かか…カービィに触りたいわ！！」

マスターハンド（通称マスター）「さあどうぞ！いい思い出を作るんだぞ子供達！！」

子供全員「はあああああ！！！！！！」

興奮が飛び交う中交流会が始まって、色んな人たちがマリオ達にふれあい・遊んだり・演技をする。そんな中…

マリオ「おーおー、ネスの奴…子供に人気あるな。」



ルイージ「うわー羨ましいなー。まあ、ネスはスマブラ子供軍団の頭だしね。（笑）」

ピーチ「んー。私達も負けられないじゃない」

マリオ「えへへ！そうだね姫」

ルイージ「おっしゃ！頑張るかあー！」

マリオとルイージとピーチが交互に群がっている場所へ言った時、特に団体の子供達の中で人気だったのは『ネス』だった。

先ほどの試合でカッコイイ！・超能力を目の前で見たい！サインしたいという単純な理由で群がっていた。

ネス「はい！どうぞ」

子供A「ありがとうお兄ちゃん！！」

子供B「僕も僕も！！」

ネス「慌てない 慌てない ちょっと待っててね坊や。」

子供B「はい」

ネス達は乱闘を見に来た複数の親子連れ子供達・一部大人達に拍手が飛び交う中…

ファルコン「さあ見るんだ！俺の素晴らしいピン・ク色の筋肉を

「!!」

ムチーン…。

自慢の筋肉を見せるためにポージングを取ったのだが、逆に子供達が顔を青ざめながら逃げ腰の状態で一步一步と下がっていく。

子供達一同「気持ち悪いー（逃げ腰）」

ファルコン「ウソウソ！（汗）嘘だつてば！！これを見てくれshow me your moves!!」

オリマー「おいおいおいおいファルコン君（汗）逆に子どもたちが怖がっているじゃないか…（呆）つーか逃げているし…」

一方西際では茶色い毛を全身に生やした大きい猿が子供を背中に乗せつつ、部屋を走り回りある程度満足させた後次に乗る子供・大人が群がっている場へと戻ってきた。

スタンツ！

ドンキーコング（通称ドンキー）「ウホッ！ホッホッホ??（さあ！次は誰が乗るんだい??）」

ディディコング（通称ディディ）「次は誰が乗るの??って言うてるよー!」

子供G「じゃあ僕!」

ドンキー「ウツホッホー!!!（OK!じゃあ、俺の背中に乗りな!）」

」

各自のサインを書いて・ファルコンはオリマーに呆れながらポージングから自慢の技を…ドンキーは相棒であるディディに通訳を任せて、複数の子供達を背中に乗せて交流室を故郷のジャングルのように動き回っていた。そんな中…

子供C「お兄ちゃん！コレを曲げてみてえ」

ネス「おっ？いいよ！」

ネスはある程度サインを書いた後、今度可愛らしい女の子の一人がネスの前にスプーンを突きつけて『超能力を目の前で見たい！』と要求してきたので、ネスは女の子の髪を撫でながらスプーンを手に取り、少しながらの力をスプーンに送り込んだ。

ネス「よく見るんだよ。ホラっ！」

グニヤリっ

ネスが少しスプーンを前へと押した時、スプーンが柔らかくなったように曲がって、見ていた子供・大人達が大歓声を出した。

子供C「すごい！！（興奮）お兄ちゃんもつとやって！やって！！」

ネス「あはは！じゃあ、ヨーヨーの技でも見るかい？」

子供全員「見るう！！」

ネスはズボンのポケットの中にあつたヨーヨーを取り出して、大人でも真似が出来ない大技を複数子供・大人達に見せたのだった。

リュカ「oh…先輩人気ありますね」

リュカが一人の男の子にサインを書け終えた時、ネスは大技を披露しながらリュカに言った。

ネス「リュカ…お前も何か出してみる。次はシャトルループ」

キヤアアア！ネスのヨーヨー技で子供達は大興奮し、更にヒートアップする。

リュカ「うーん、だったらコレかな？PK Freeze」

パキンツ…パキキキキ。

軽い氷魂を空中に作り出して、超能力で少し形を修正した後、向日葵の形をした氷像を生成し、超能力でゆっくりと浮遊させながら床へと置いた。

子供D「す…すごい！」

大人D「こ…細かいなあ（汗）」

子供C「試合に居なかったのに」

子供H「最下位だったじゃん。」

リュカ「い…ごめんね。（汗）」

ネス「ぷっ！」

リュカ「あっ！先輩今吹いたでしょ！！（怒）」

一人一人の子供のブーイングの声を聞いたリュカが軽く謝罪した後、ネスの笑い声に聞こえやや憤怒する。そして近くにいたマルスがこそっと呟いた。

マルス「ふふふ…これも僕の作戦の内だよ、金髪腹黒泣き虫少年君

」

スス…

抜群のタイミングでマルスが現れてリュカに近づく。そして二人は背中合わせの状態になり、マルスとリュカはそのままの状態で他の子供達・大人達に要求を応えながら小声で悪口全開の小言戦争が行われる。

リュカ「聞・こ・え・て・い・ま・す・よ？…腹黒鬼畜策士サディストS王子…っか子供・大人達がいる前でいっちゃだめでしょ？それに作戦なんて始めからあったんですか？」（黒）」

マルス「ふふふ…一言多い・それに五月蠅いよ、金髪腹黒泣き虫少年君 今更考えては人・間としてはお終いだよ （黒笑）」

リュカ「普・通…気になるだろ。（ツツコミ）っか今頃思いついた物でしょ？（黒笑）」

マルス「アッハッハ 真面目すぎるのは良くないねえ。人生楽しく

無くなるよ泣き虫毛虫少年君??（ド黒）「

リュカ「Ha!...一生言ってるやクサレ王子。（ド黒）」

マルス「それはこっちの台詞だよ、腹黒泣き虫少年君（ド黒）」

ネス「（仲が悪いのか良いのかいったいどっちなんだろう...）（汗）」

子供・大人達の要求に応えながら真つ黒コメントを小声で吐き出す二人を除いてマリオ達は、長くて短い時間の交流を深めていった。

…数時間後　一階　廊下…

ネス「ふう…疲れたなあ…」

休憩時間が入りネスは交流室から出て、壁際に設置されてある自動販売機に寄りファ　タを購入しようとした時…

ガコン…

ネス「？」

？「はい！お兄ちゃん」

購入ボタンを押し取り出し口に視線を向けた時、膝までの身体を持つツインテールの女の子が、ニコニコ笑顔でファ　タを両手でネス

に差し出してきた。

ネス「き…君は……」

ネスは少し思い出し、先ほどのスプーンを差し出した女の子のことを…

子供C「休憩時間に、あたち…お兄ちゃんの後を付けてきちゃって…えへっ」

ネスはやや驚いた表情を出した後、女の子からファ　タを受け取る。

ネス「とりあえず、ありがとな。ここで立っているわけにもいかなしいし…」

ネスはどこか座れる場所がないか辺りを見回す。左側にちょうど椅子と円型のテーブルが多く設置されているホール（休憩所）があった。

ネス「ちょうどあそこに座る所があるから、其処に座ろう…それと…」

ガコンツ…ヒュンツ…

ネスは自動販売機に向けて指先に光を放った時、購入した飲み物と同じように取り出し口から出てきて、その飲み物が白い発光で包まれながら女の子の手元へと飛んできた。

ネス「はい、これさっきのお返しね。（笑顔）」

女の子は両手で収めるように飲み物を受け取った時、女の子は更に喜んだ。

子供C「ありがとう！お兄ちゃん！！」

ネス「あはは。（コレだけのお返しなのに…こんなに喜んでもらって俺は嬉しい気がするな。）」

ネスは心の中でそう呟き、椅子に腰掛けてファ　タを飲み始める。そして沈黙を破るかのように女の子が飲み物を少し飲み込んだ後、少し羨ましそうに呟いた。

子供C「お兄ちゃんはいいいね…不思議な力があつて……」

ネス「え？」

ネスは飲む動作を止めて、女の子を見つめる。

子供C「だって…物を動かしたり、空を飛んだり、不思議な現象とかも出来て…あたちにもお兄ちゃんのような強い人になりたいんだもん……」

ネス「どうして？」

ネスは女の子に聞いてみる。

子供C「あたち…学校でいじ…められていて…それで……それで…」

ネス「っ！」



女の子が喋るたびに嗚咽が出始め、だんだんと蒼い瞳から雫が溜め込んでいく。

バチッ…

ネスの脳裏に少し電流が走る。

子供C「いじ…めに対抗する力が

…い　　ん！　　…！…

…　　じん！　　ん！…！…

…無いんだもん！」

遂には泣き出してしまい、ネスは少し脳内にかすかな声と白黒の映像と雑音を見て、聞いて少し瞳を閉じる。

子供C「うう…あいつらが…悪いんだ！

ジジジ…

…よ…な！

…お…がい…！ぼ…！…！…！…

ジジッ！

…ねよ…ま…！…

あたちは…なにも…悪くは！！」

スウ…

女の子が泣きじゃくっていた時、頬に暖かい感覚を受ける。女の子は少し違和感を感じて顔を上げると…

ネス「泣かないで…」

パサツ…

ネスの顔が間近にいて更に自分の髪を撫でられている。どうやらネスは自分の胸に女の子を引き寄せて宥めているようだった。

子供C「お兄い…ちゃん？？」

ネス「他人に憎しみを持っちゃ駄目だ。…それと何よりも…」

ネスは女の子の頬に流れ落ちる涙を手で軽く拭き取った後、ぎゅつと抱きしめるように女の子に言った。

ネス「どんなに苦難をその身に受けようとも、

バチッ！

…い…？

…つぶ。…には…い…があるから。

ジ…ジジッ

…じ……さ……

それを耐える心の強さが必要なんだ…」

子供「……ろ?？」

女の子が少し涙ぐみながら真顔のネスに向けて見上げる。

ネス「いじめなんて…直ぐに終わるさ。そんなに長くは続かないし、  
…

…じ……んな……!

…くは、……に使ってい……んじゃない!

バチッ!ジジジジジ!ガッ…ガガ…

……い……が……せい……

…もっ……!……が、……んじゃう!!

ある程度の月日が流れれば君は別の場所がっこうへと行くんでしょ?？」

子供「う…うん、そうだけど……」

ネスの脳裏にまた映像が映って、やや言葉が途切れながら聞こえてくる…。

ネス「そこでもう一度新しい友達を作ってさ…それで自分自身も変

わって…

…人…い…き…ば…。

ガガガ…

ガガガガ…

…ルナ！…オロカナ…エドモ！！

ガガガガガガ！

…来るな！…ばけ…！！…

新しい道へ歩めばいい…自分だけの道だから別に他人から言われるほど筋合いはないってね！」

子供C「にい…ちゃん…」

ニカツとネスは脳裏に映ったモノクロの映像を無視し女の子に向けて笑うと、女の子も先ほどの泣きじゃくる仕草から笑顔が戻ったように光の笑顔へとなる。

子供C「えへ…へ、まるで魔法でも…本当にかけられたみたい。」

だが、脳裏に映る映像は悲惨な状況となって乱れながらも映し出される。

ネス「俺も…君と同じような



である帽子を少し被り直し、テーブルの上に置いてあったファタを手に取る。

子供C「プライ…」

ネス「？」

女の子の言葉を聞いてネスは、「？」が頭の上に付くように少し呆ける。

プライ「（それが、あたちの名前。その名前のせいであたちは…）」

ネス「名前だけで本気で文句をつける奴なんかないよ。」

プライ「え？？」

ネスは飲みかけたファタを飲みながら、窓に映る夕焼けの空を見ながら言う。

プライ「どうして…」

女の子はやや驚きながら窓際に移動したネスを見る。

ネス「俺は人の心を読めるんでね。『テレパシー』って奴だが…それは置いて、名前は深い意味があって付けた物なんだ…これは一生の自分だけの宝物なんだよ。」

プライ「宝物…」

ネス「Pray…祈りって意味なんだな。いい名前じゃないか…」

プライ「祈り…」

ネス「大切にするんだよ…もしかあつたら君の両親や俺でもいいから相談して…できる限り俺は君…いや君達に助け舟を差し出すから。」

プライ「うん！」

プライは取り戻した笑顔でネスに向かって微笑んだ時、窓際にいたネスも彼女に答えるように同じ笑顔で返した。

…

…

…

ネス「さあ…一緒に戻ろうか。そろそろ休憩時間が終わるだろうし…」

カランツ！

ネスは空になった二缶のファタをゴミ箱へと投げ捨てた後、プライに向けて手を差し出す。

プライ「うん！」

プライはネスの手を掴んで、交流室へと歩みだす。すると…

ザザザ…

ネス「（またか…。）」

ネスの脳裏に雑音が流れる音を出しつつ、幼い頃の記憶が映像として現れた。

…過去の映像　夕暮れ　どこかの道端…

ネス「トレーシー、手を離すなよ。」

トレーシー「分かっているよ！家に着くまでお兄ちゃんのお手手は、一生離さないから！」

黒髪の少年「ネス」は、母親譲りの短い金髪を垂らすピンクのワンピースを来たネスの妹「トレーシー」の手を取って帰るべき場所へと歩き出す。

トレーシー「お兄ちゃん…足大丈夫？」

ネス「ん？…これか??」

ネスはトレーシーが言った足の部分を見ると、シミのような物が段々と紅く滲み出すように広がっていく。幼いネスは少し見た後、半分泣きそうになっている妹に少し笑いながら言った。

ネス「このくらい平気だよ。ただか転んだだけで…」



トレーシー「お兄ちゃん…本当のこと言わなくてもいいの？」

オオオオオ…

突然トレーシーが心配丸出しの表情となって、噴き出す風にトレーシーの金髪が横へ煽られながら兄である幼いネスに顔を向ける…

ネス「トレーシー…ママには絶対に本当のことを言うなよ。…またママが

ザザザザ

ザザザザ ザザザ

ザザ

…！ ……ん ……！！

ザザザザザ

ザザザザ

ザザザザザ…

雑音と映像が乱れながら赤い光らしき物が複数回り、その光の中心に立つ何か声を荒げながら叫ぶ複数の大人の物体が映る。

…じ ……む…さ……ら！

…。僕たちはこの…を受け入れるんだ…。

ザザザッ！

あの出来事で取り乱す姿を見たくないから…な？」

一瞬だけ脳裏に映った出来事<sup>デジャブ</sup>をネスは少し額から汗を流し体を震わせながら、自分の中にある勇気を頼りに心配の表情を出す妹<sup>トレーシー</sup>に、少なからの勇気を付けるように言った。

トレーシー「う…うん…わかったよ……」

ネス「よしよし、今日の夕飯はハンバーグかなー？それとも…」

トレーシーは兄<sup>ネス</sup>に言われるままに少し頷いて、顔を前へと向けなす。ネスも前へと向いて自宅へと歩き出した。

あの日を振り返らないようにと…

…

…

…

ネス「（俺がまだガキだった時に、妹<sup>トレーシー</sup>と一緒に手を繋ぎながら歩いて帰った記憶と…思い出したくないことも…）」

プライ「???…どうしたのお兄ちゃん??」

ネス「あ…いや、なんでもないよ。」

ネスはややカアッと顔を赤く染めながらプライに見えないように逆の位置で背ける。プライはやや「？」が頭の上に付けながら不思議

そうにネスを見ていたのであった。

（おいおいおい…これじゃあまたホームシ…いや…なんでもないさ  
……もうあの出来事は…）

終わったんだ…いや、

終わったはずなんだ…。

ネスはプライの手を握り締めて、元の交流室へと戻っていくのだった。

t o b e c o n t i n u e s . . .

## Scene 2 Past after image (後書き)

次回からダーク・グロ要素が出てきます。更新は現実上…仕事が増えたら更新する予定です。遅くなるかもしれませんが、どうか暖かい目で次回作をお待ちください。

# Scene 3 Solved seal . Still , the crim

漸く忙しい合間を潜って更新完了（汗）。

グロテスク・ダーク・出血の表現が含まれています！！閲覧ご注意ください。

解かれていく過去の封印の映像

青年は何度も否定しても…

決して逃れることすらできない。「大罪」

今の世界で生きる青年の目には、

何を思い…

何を感じ…

何をその眼で、映しているのか…。

…夜 スマブラ寮 三階 306号室 ネスの部屋…

ビーー！ビーー！！ビーー！！！！

ネス「！？？何だ！？」

ハウッ！

ネスはグッスリと暖かい布団に身を包んで眠っていた時、騒がしい

警告音に飛び起きて目を覚ます。

ネスはすぐさまパジャマを脱ぎ、タンスの下にあった赤い帽子と蒼いジャケツトと黒いＴシャツと長いズボンを身に包んで、脱皮如く自室を飛び出してある場所へと向かう。

ネス「（襲撃か！？それとも…）」

ネスだけでなくマリオやリンク達も（一部私服）来て全員が二階の作戦会議室へと走る。

ガノンドロフ（通称ガノン）「折角夢の中で、有楽街のネーチャン達と合コンアンド・デートをする夢を見たのにいゝ。」

ファルコン「俺も俺も！アンタと同じ夢を見た！」

リンク「テメーのようなブタおじさんと音速マッチョマンに、寄りつく女がいるかよ？（ツツコミ）」

ビシッ！…っとリンクが二人のムサイ二人組にツツコミを入れた時、すぐ横から走るマント無し版のマルスが自信満々の表情で、リンクとおっさん共のツツコミ戦争へと乱入する。

マルス「フフフ…僕なら１０人ぐらい作れる自信が…」

キラリーン…と、マルスの蒼い髪を右手で少し払った時の効果音を付けたような動作を、リンクとおっさん達に見せつけていた時…

ゼルダ「私も同意しますよ、リンク。（黒）…それと、ナルシスト王子は少し黙ってくださいな。なんか気持ち悪い、っーかキモイ。」

（ボソッ）「

ゼルダ以外の仲間達全員「十分聞こえてるって。腹黒王女様（汗）  
」」

ゼルダの腹黒いセリフを仲間達全員、額に冷や汗を流しながら聞いて、いろんなグチとツツコミを叩いているのだが…

それでも彼らの本当の姿は、世界の秩序を守る正義の英雄軍団『スマッシュブラザーズX チーム』であり、日々の乱闘はこの非常事態に備えての鍛錬であって観客側だと彼らの乱闘を楽しむ表姿に過ぎない。

全員「マスター！！」

バタンッ！

マリオ達が作戦会議室の扉を開けて様々な機械を弄くりまわしているマスターに言った。

マスター「来たかお前達…総員に言っ！緊急指令だ！！」

ウイーン…

マスターが仲間達に振り返った時部屋の中央から機械音を出しながら大きな円型のリーダーが現れて、大きく点滅している箇所人指し指を差してマリオ達に言った。

マスター「今晚23：55分に英の国から緊急信号SOSが入った。一匹の未確認生物の襲撃があって交戦したものの、都市・英の国の



軍：八割以上が壊滅した！！すぐさま向かって市民の救助・未確認生物の排除を願う！！」

マリオ「な…何だって！？英の国ってつい先ほど夕方に俺達と交流したばかりなのに！！！！！」

サムス「てか…八割以上ってどんだけ強大な敵なの！？」

英の国は現実世界の最大軍事国家であって武力・政治的にも圧倒的に強いはずなのに、一匹の未確認生物で壊滅されてしまうほどの無力が出た事実のマリオとサムスは驚く。

リンク「軍でも適わないありえない生物って…っおい、ネスー！」

タンツ！ヒュオオ！！

リンクが驚愕の声を上げていた時、ネスはテレポーターションして外へ飛び出し、低空中飛行しながら英の国へ繋がるトリップゲートと一人向かう。

マスター「もう既に英の国へと繋ぐように設定した！出来る限り急いでくれ！！」

マルス「言われなくてもわかっていますよ！」

カービィ「ネスティー待って！！」

フォックス「ファルコ！アーウインの手配を！！」

ヨッシー「ヨッシヨシ！（スーパードラゴンになるです！！）」

マリオ「まったくアイツは!!」

仲間達はマスターの声を聞くまでもなく、瞬時に外へと飛び出し一同は一人トリップゲートに向かっていったネスの後を追った。

マスター「（守らなければ…出来る限り彼らに手助けをしなくては…）」

オリジナルワールド  
彼は想像世界の神。神は一切手を出してはならず、無闇に必要が無い限り人前に現われてはいけないのだ。

スマブラメンバーが全員居なくなった後マスターは、再び機械をいじくりまわして破壊を招いた元凶を探っていく。

マスター「（これが!?)」

カチッ!

気になる強い波動がマスターのいる作戦会議室の機械を通じて警告音を出した。

マスター「（凄まじい覇気だ。…何者。）」

強い波動を出す座標ところにモニターを映すと…

マスター「ま…まさか……そ…そんな……」

モニターに映る紅蓮の世界に一匹だけ空中浮遊している白いローブのようなものを全身に覆った生物を見て、顔は無いものの言葉は悲しみに包まれていた。

マスター「こんな……ことが……」

マスターはヘナヘナと冷たい機械に寄りかかって涙でも流しているかのように佇んでいた。

私は…認めぬ…認めぬものか…!!…壊滅した正体が…  
だと……」

」

…トリップゲート ワープ中…

ネス「(まさか…信じられない……このことは……つく!)」

複数の光が高速に流星のように前へと走り出す中、ネスは先ほどの交流会で出会った女の子のことを思い出して苦悩する。

回想　…スマッシュワールド　すま村　トリップゲート前…

ロイ「それじゃあ皆さん、帰宅の旅路気をつけてください。」

ルカリオ「また…そなた達に出会えることを、楽しみにしている。」

ロボット「ミナサンオゲンキデ、マタアイマシヨウ！」

ワリオ「ぬっはっはー！また会った時は、俺様専用と…っ・て・お・き・のショーを見せてやるからなー！」

ルイーダ「下品のショーと間違えてんじゃねーの？（ツッコミ）」

ワリオとルイーダのコントが流れながらも、英の国の住民達がマリオ達に見送られながら、一人又は家族達がトリップゲートの中に入っていく。そんな中…

プライの母親「有り難うございます。家の娘が貴方様有名人に迷惑をかけて…」

マリオ「いえいえいえいえ（汗）、僕達は貴方達が住まう世界の人々が大好きなんです。迷惑なんて誰も思っていないですよ！（笑顔）」

栗色の長い髪を流すプライの母親と父親が、ペコペコとマリオ達に向かって頭を下げる。

スマブラメンバーのリーダー『マリオ』が、頬が少し赤くなりながらも軽く両手を前に出し何度も横へと振るって、迷惑をかけていない仕草を取った。

プライの父親「本当にすみません。目を離れた際にこの子は…」

ネス「そんなに謝罪しなくてもいいさ。子供は最初のうち、色んなところへと興味心身に足を運ぶからね。まあ、無理もないさ。（笑顔）」

ネスがマリオをフォローし、続いてアイクが手を組みながら、プライの両親に向けて続きを言う。

アイク「何かと触れ合い、何かと行動することで人は成長し、自然にと身に付ける物だ。いろいろとこの娘に、今にしか出来ない事を教えてあげる。」

プライの両親「あ…はい。」

ガヤガヤ…

英の国の住民達が8割ぐらいトリップゲートの中へ入って数が少なくなった時に、プライの両親は娘の手を繋いで一緒にトリップゲートへと入ろうとした時…

プライ「お兄ちゃん!!」

ネス「えっ?」

プライが突然親の手から離れてネスの元へと慌てて走り寄る。ネス

は少し驚いた表情で近くまできたプライを見つめた。

プライ「お兄ちゃんにコレをあげるのを忘れてたら、…はい!!」

ネス「ん?…これは…」

ネスは手渡された物を見ると、手作りなのだろうか星屑のように太陽の光で光る赤色の糸で結んだ輪…

どうやら、手頸に付けるリング?のような物らしい。

プライ「あたし特製の『お守り』だよ!あたしはキラキラに光る空色の輪だもん!!」

見て見て!…とも言っているかのようにプライが、右手首に付けている空色の輪をネスに見せつける。

ネス「また君と再会する時に、付けていれば俺がどこにいてもわかるって言うんだろ?」

プライ「そうそう!あたちが観客席で試合を見る時どこにいても、お兄ちゃんが付ける赤い輪で見つけられるんだからー!!」

プライが笑顔でネスにそう言った時…

少女?『これはね… と、私 が、世界のどこかで再会した時に付ける物なのよ。』

少年?『約束の輪…と言うのかい ?』

少女？『そう…遠い世界にいても、また再び  
…祈りと愛を込めて付ける物なの。』

少年？『祈り…愛…                      と再び出会えるなら…僕は……』

ネスの脳裏に少女と少年の声が響いて、映像は雪のように白くて何も見えないが…

ネス「（いつのまにココへ来てたんだろ？）」

どうやらネスの精神が現実世界から心の世界に自然にダイブしたらしく、自分の体を見ると全身が服ではなく裸であった。

ネス「（この姿は3年前の冒険以降だったな。だけど…）」

サワッ…

足元に生えている花のような物が風でゆっくりと揺らぎながら、二人は楽しく話しているように精神体のネスは感じる。

ネス「（心の国『マジカント』は、消滅したはずだ…）」

ネス精神体が少し頭を傾げ、顎に手を当てながら悩んでいた時…

？『化け物が                      と一緒に生きるって？そんなの有り得ないね！』

？『化け物は大人しくどつかで勝手に息絶えればいいんだよ！！  
は僕達の者だ。』

？『に触るな化け物。化け物は燃えるように消えてしまえ。  
っ！か僕達の世界すら存在するな。』

ネス「なっ…！？」

突然、世界が純白から黒い暗闇に変わって、満ち憎しみと怒りと苛立ちが混ざった声が入って、ネスは声が出た方向へと体を向ける。

ネス「！？」

？「よお化け物ん。久し振りだなあ？？」

暗闇の中から現実世界でも見かける少年が一人現れる。ネスは目の前に現れた少年のことは知らないが…先ほどの過去の残像と声で脳に電気が、少量走ったかのような感覚が走る。

ビリッ…

少年「？？頭が痛いのかい？？カッコイイ顔が鬼のように歪んでいるよお？？…クスクス。」

ネス「う……………く……………」

バチッ…



先ほどよりも強い刺激が目の子どもが笑う度に脳裏へと受ける。

ネスは額に左手を当てながら脳裏の痛みを和らげようと、頬に流れる汗を流しながら少し身体を揺らす仕草を取った。

ネス「はあ…ハア…だ…誰なん…だ。」

少年「嫌だなあ…。僕のことすら忘れてしまったの???どこにも見かける老人<sup>ジジイ</sup>みたいに…アハッ！」

少年は笑いながら、自分の腹に向けて手を掴むように触る。その後…

ブチブチブチ!…ブチュチュチュ!!!

ネス「っ!?!」

目の前の少年が自ら肉を剥がすように右腹から左肩まで斜め一直線に引き裂いた。

ポトポトポト…

噴き出す紅い液体の中に、内蔵と肝臓と胃と小腸・大腸等の臓器が滝のように地面へと零れ落ちる。

少年「お前…昔はこっやって僕達にやったじゃないか…君の手で僕らの体を、引き千切るように引き裂いて…さらに…」

グシャアアアッ!!

少年が頭部に手を当てた途端爆発し、粉々に分解された脳と髄液と両眼が飛び散る。

少年「脳天をかち割って、顔さえ原型が分からなくなるほど、グチャグチャにしたじゃん??そして、」

ドスッ!ピシャッ…

鈍い音が響き、頬に何かが付いた感覚を覚える。ネスは嫌な予感を感じながら少しずつ目を開くと…

ネス「!?!?!?!?」

少年「君が持つその武器で…僕達のを殺したんだよ??」

目の前には臃げな深海のような蒼い瞳でネスを見つめる、金髪を流し白いワンピースを着た少女。少女の胸にはネスが持っている空色の剣が、少女の背中まで刺し貫いていた。

少女の白い服が段々と紅く染まり、口から少しずつ血を流していく。

ネス「ち……がう……お……俺は……」

少年「違わないよ。だって君は…」

ガシッ!

突然先ほどの少年が原型すら留めていない人の体で、ネスの肩を掴む。

人だった者A「君は惨殺者。」

違う！

人だった者B「君は破壊者。」

違う！！

人だった者C「君は怪物。」

違う！！！！

人だった者D「君は……」

ちが……！！！！！！

少年だけではなく、地面から少年と同じように原型さえ留めていないグロテスクの死体達がネスの手と足を掴んでいく。そして死者達は同時に言った。

人だった者全員「黒き悪魔だ。<sup>デーモン</sup>」

ネス「や……………め……………！！！！」

ネスは手・膝を地面につけて、息を荒げながら脳裏に響く呪詛のような言葉を拒絶するように頭を横に何度も振る。

だが、纏わりつく死者達は容赦なくネスに言う。

人だった者E「君に拒否権なんてない。」

ネス「め……ろ……!!」

……せ……

人だった者F「君は世界の敵だ。」

……ん……

ネス「や……め……ろ!!」

……ぱい……

人だった者G「君は地球神ガイアさえ見捨てられた哀れな子。」

……せん……ぱ……い……

ネス「やめろおおおお!!!!」

先輩!!!!

リュカ「先輩！」

マルス「ネス君！！」

パカツ！パカツ！！パカツ！！

ネスははっとなって声がした方向に顔を向けると、平らのどせいさんの形？をした馬のように動く、ちゃぶ台の上にリュカとマルスが乗っかりながら空中飛行するネスに追いつく。

ネス「リュカ…マルス……」

リュカ「先輩早いですよー！もう一人で先走っちゃ駄目ですー！」

マルス「そうだよネス君」

ヒュウン！

すると今度は飛行しているネスの隣に白い戦闘機：「アーウィン」が現われてファルコとディディーが二人乗りしながらネスの動きにあわせる。

ファルコ「あいつの言うとおりだ。もうあのような出来事は見たくないからな！！」

ディディー「そうだよネスう！」

キイイイン！！！！！！

すると今度は伝説の乗り物『ドラグーン』に乗っているカービーが現われてネスの左側に寄る。

カービー「ネスティー！僕らも同じだよ！もう無茶な真似はさせないから！！」

仲間達「同じく！」

ゴオオオオオ！

更に後ろから「ファルコンフライヤー」「スターシップ」「オリマ一の船」「スーパードラゴンヨッシー」が現われて全員がネスを守るような形で囲んでいた。

ネス「みんな…」

更に赤い帽子に翼が生えた羽Marioと背中のイカロスの翼で滑空しているピットが、ネスと同じように飛行しながら寄って来る。

Mario「ネス…お前だけじゃないぞ。先ほどの交流会で多くの友達になった者達を心配しているんだ。決して…一人で抱え込むな！一人で悩むな！！…俺達が心配してしまう、あの時のように。…」

ピット「そうですよ。僕も…先ほど友達になった子を心配しています。それにネスさんはもうあの時以降、あのような怪我を見たくありませんからね…」

ネスは前回の出来事を思い出し少し目を閉じる。

あの時は…自分の腕が粉々に吹き飛んでも構わなかった。

過去に…この手で自我を無くした自分が、無差別に人を殺して…

三年前…マリオ達にマスターに頭脳を操られたとはいえ…敵として彼らと戦い、多くの仲間を傷つけてしまった。

いつそ…この手が無くなれば、自分が死ねば、誰もが傷つかないで平穏な時間が与えられたはずなのに…

ネスはそう思いながらも、心の中で惑いを掻き消すように冷静を取り戻していく。

だけど、この力は必要であつて…

内心は…死にたくても、死ねなかったんだ。

昔、『』との約束した言葉と…

自分を必要としてくれる仲間達の声が…

自分を先へと導いてくれる…。

三年前の地球を救う旅でそのことを思い知り…

続いて二年前の、オリジナルワールド想像世界の危機から救うために、力を使った。

人を仲間を…

が愛した世界全てを守るために！！

ただ、これだけの理由なんだけど…

この一つの理由が、一番大切なことであり…

どこの世界の人でも誰もが持っている

戦う理由の一つだと、言うことを…

この何気ない理由が…

過去に縛られていた人を、水を流すように前向きへ導いてくれる…

当時の12歳だった俺は、誰かさんの受け折りで、ようやく気付いたのだから…

ネス「…そうだね。ごめんねマリオ…ピット…それにみんな……」

ロイ「仲間だからさ　少しは落ち着こうぜネス！！」

マリオとピットとロイの言葉を聞いて少し頭を冷やした後、目を真っ直ぐに向けて遙か先に見えるワープの出口を見つめた。

ヒュウウウウウン！！

サムス「ワープ抜けるまで、あと10秒！」



スターシップに乗っているサムスがそう言った時、仲間達は意を決して身を構える。

……9

……8

……7

……6

……5

仲間達は強い光溢れる出入口を見つめて、これから映る風景を瞬想像する。

……4

……3

……2

……1！

視界がホワイトアウトになって、ネスは一瞬目を閉じた。

……0！！

バシユウウウンー！！

ワイプから抜けた音が鳴って少しずつ目を開くと……

地上・空が血のように赤く染まっっていて…

コンクリートの壁が、ボロボロに崩れ落ちたビル等の建物達。

大量の血痕がペンキを大量にぶちまけたぐらいに付着したビルと、道路と交通整備等。

無残に転がる現代兵器だった物の亡骸。

グチャグチャに引き裂かれた臓器類。

骨を砕かれ原型さえ留めていないぐらいに四散した腕・頭・足・体。

戦場のような真紅の世界が広がっていた。

t o b e c o n t i n u e s . . .

**S c e n e 3   S o l v e d   s e a l .   S t i l l ,   t h e   c r i m i**

次回からようやくあの人を出します。

更新も亀並みになるかもしれませんが、しばらくお待ちください。

## Scene 4 The world of purgatory with

やっと更新・・・

前半は第二主人公「マリオ」、後半は第三主人公「リンク」がメインとなります。

第一主人公「ネス」は冒頭しか出てきません。（謝罪）

酷い残酷描写とやや女性向け文があります。閲覧ご注意ください。

Scene 4 The world of purgatory with

屍と肝と嘆きが多く地上へと重なり…

祈りの声さえ届かない…

地獄よりも過酷な世界…

『煉獄の世』と云われている。

そこにあるのは救いを求める光が…

それとも、絶望の闇が…。

…現実世界 英国 中央都市RZ グリーン公園…

ルイージ「な…なんだよコレ！」

ピット「うっ！」

仲間達が降り立った場所『グリーン公園』には、元は緑一色で覆われてた広い公園が、鉄の臭いと尿と糞の臭いが充満していた。

多くの遊器具が血と臓器が絡め合うようにこびり付き、緑の芝生が人の血と肝で赤く染め上げられて…

所々に転がっているかつては人間だった者の死体が、無残にも積み重ねた状態で放置されていた。

ピットとルイージはグロテスクの死体をそのまま見たため、口を手で覆って吐き気が首から上へ通して襲ってくる。

ゼルダ「つく…なんてひどい…ことを…！」

サムス「（いけない…こんなときに吐きが…）」

マリオ「っ！…とりあえず搜索だ！まずはチームに分かれて一般市民の救助に向かうぞ…！」

マリオ以外の仲間達「っ！…マリオ!?」

ゼルダの声を聞いてリーダーであるマリオは、仲間達全員が恐怖と驚愕と困惑に陥る前に果敢なる指摘を出した。

マリオ「生存している市民を見つけたら、すぐにトランシーバーで連絡！この都市を襲った敵をぶつとばすのは、市民を出来る限り救助してからだ…！」

仲間達全員はマリオの指摘でやるべきことと思い出し、一瞬の内で我を取り戻した。

リンク「御意！」

ネス「OK！」

マルス「了解した…！」

仲間達は瞬時にチームに分かれて走り出し、マリオチームは北方面・リンクチームは東方面・マルスチームは西方面・ネスチームは南方面へと散開した。

…現実世界　英国　中央都市RZ　北方面　高層ビル通り…

マリオ「くそっ…酷いことしやがる……」

グシュッ…グチュッ……

マリオは道路や高層ビルの壁等に付着した血と、破れ掛けた腸と臓器の修羅のような世界にたった一人だけ…立っているような感覚を感じる。

破裂した内臓と血を踏み潰す音を立てながら険しい表情で生存者を探す。

オオオオオ…

耳に聞こえる不死者のような声、肉の組織と骨が見えるぐらいにグチャグチャに崩れた片腕を、上空に浮かぶ赤い月へと伸ばしている死体が幾つか道路に転がっていた。

マリオ「（道路全体まで人を、壊れた玩具を遊んだように投げ捨てやがって…見つけたら容赦しねえ！）」

ギッ…

両眼を抉ったように道路へと抜かれ落ち、ブチ撒かれた血と内臓と死体を見て、マリオは静かに右拳を強く握る。

心の中で沸々と無差別に殺した敵へ怒りを込め上げながら…

マリオ「（あれは…。）」

数歩き行く手を阻むスタンド類を退かしたところで、積み上げられた瓦礫の間に見える肌色のような細い物が見えた。

マリオ「（人の手か！？）」

グジュツジュ…ピシャピシャ…！

マリオは足元にあった内臓や血を踏みながら、瓦礫の間から出ていく肌色のような細い物へと走り寄る。

マリオ「（やっぱり人の手だ！それに、まだ暖かい。止血さえすれば…）」

瓦礫の間から出ている手を、マリオはすぐさま手首辺りに握り絞めて脈拍を確認する。

トクツ…トクツ…

右親指に受ける命の脈動、微弱だったのだがそれでも人が生きている証明なのだ。

マリオ「（それにしてもでかい瓦礫だ…流石に俺一人じゃあ持ち上



げられない。下手に助けだそうとして十八番のスピンをやったら、瓦礫の間にある空気穴を塞いでしまう。」

マリオは目の前にあるバカでかい瓦礫を見て、一人での救出は困難だと瞬時に悟った。

マリオ「（近くにいるドンキーなら、退かせるかもな。クッパは今ルイージとワリオと一緒に、此处から遠めの病院へ向かっているし、姫様は上空にいるし…）」

マリオは腰に掛けてあったトランシーバーを取り出して、「ドンキー&ディディ」へ通信を開いた。

マリオ「ドンキー、ディディ！！生存者発見したんだが、俺一人では退かせない大きな瓦礫があるんだ！至急俺の処へ来て、手を貸して欲しい！！」

ドンキー「ウホ！？ウホホオオオ！！（マジで生存者を発見したか！？よし、ちゃちゃつとアンタントコへ行くぜ！！）」

ディディ「わかったよー！！今デパートの屋上辺りにいるから、すぐに向かうね！！」

マリオ「急いでくれよ。目の前にいる人の命が消える前にな…」

マリオがそう言ってトランシーバーを切り、自動的に電力節約モードに入る。

瓦礫の穴から出ている腕に付いている傷口に向けて、腰に付けていた四角い形の応急セットから「ガーゼ」を取り出す。

マリオ「（やっと見つけた命なんだ！！ここで死なれたら嫌なんだよ…。」

マリオは心の中でそう呟く。傷口部分にガーゼを押さえ、圧迫止血を行っていた頃…

…現実世界 英国 中央都市RZ病院内 1階…

ガラッ！ボコッ！！

クツパ「まったく、我輩はこんな汚い壊し方はせんぞ！我輩ならちやんとボッコボッコにカツコ良く登場することを考えて…」

ワリオ・ルイージ「（同じだろーが（汗）それは置いて、そんなことを考えている場合じゃないと思うんだけど…）」

所々に転がっていた瓦礫をクツパの怪力で退かし、強引に病院の中へ入る。病院内も外と同じ死体と血で埋め尽くされ、天井・壁にも血がこびり付いていた。

ワリオとルイージはクツパに向けて心の中で突っ込みながらも、手で瓦礫を退かし生存者を搜索する。

ルイージ「…ほ…本当に…いい…生きている人、いるのかな？…何処見ても死体だらけだし…」

ルイージは両手を胸に当て全身体にガクガクと震えただけながら、

鮮血に染まった病院内の周りを見る。

ワリオ「ん？パソコン一つ付いているぞ。と言うことは……」

ワリオは硝子越しに光が出ている処へ目を向けてドアの上にある看板、『ナースステーション』に目を付ける。

ワリオ「配線状況と、起こった惨劇の情報がログとして残っているかもしれないねえ。」

ルイージ・クッパ「マジ？」

ルイージとワリオとクッパは、散乱した書類と死体と医療器具をかき分けながらナースステーションの中に入り、一部のパソコンが点滅している処へと寄る。

ワリオ「ソフフ、電力辛うじて生きているぜ？…それと、配線機能はどうかな？つと……」

カタカタカタカタ……

流石盗賊と言ったか、手なれた手付きでパソコンのセキュリティを解除し、電力・配線状況を見る。

ワリオ「んー、大半死んでいるが……一か所だけ生きている配線があるようだねえ。」

クッパ「そこは何処なのだ？？」

ワリオ「此処！……なんだが。」

パソコンに映る生きた回線を目線で辿って見ると…

ルイージ「しゅ…手術室！？それに地下一階だし！！」

クッパ「だが、壁に付けてあるナースコールが、『しゅじゅつしつ』のランプ点滅しているぞ？」

クッパの言うとおりパソコンから数メートル離れた壁の所に、ナースコールの端末の一つである『手術室』のランプだけが、数回点滅を繰り返しながら光っていた。

ワリオ「生存者がいるんだよ。多分な、フヒヒ！！さて、情報はつと。」

カタタタタタ。

記録の情報を見つけるために、キーボードを打ち込むワリオだったのだが…

パソコン画面『An illegal input detected. It returns it to the last screen at once for the security protection. (不正入力が検出しました。セキュリティ保護のため、前回画面に至急戻します。)。』

ワリオ「あ？、なんだよ、こんな時にヘンテコロックだあ！？？？こんなのに…あん？なんだあ！！？」

突然アラート音が鳴り、先ほどまで見れた映像が急にひとつ前の画

面へと変わる。ワリオは苛立ちながら先ほどの画面へと戻すようにキーボードを打ち込んだが…

パソコン画面表示『Password” that you input is different. It inputs a gain and is stinky. (パスワードが違います。もう一度再入力してください。)’

ワリオ「ツチ！クソ！！コイツウ！！！」

ルイージ「どうしたのワリオ?!?!」

クッパ「何かあったのか？」

何度も何通りかのセキュリティ解除のコマンドを打ち込んでも、ひとつ前の画面・先ほどの画面に何度も戻し、戻されての無限ループかのように繰り返し作業があったのだが…

パソコン画面表示『Password” that you input is different. It inputs a gain and is stinky. (パスワードが違います。もう一度再入力してください。)’

ワリオ「コリヤ駄目だな…流石にコイツは俺様でも解除できねえ…」

ルイージ「そんなあ…」

先ほどよりも強力なセキュリティが掛けられ、流石にワリオでも両手を広げてお手上げ状態になった。

ワリオ「まったく、地下に行くルートは瓦礫で塞がれているし…」

クッパ「更に、電力不足でエレベーターさえ使えない…ようだな。」

ワリオとルイーダとクッパはナースステーションから出て地下へと続く経路を見たが、もちろん階段が瓦礫で完全に塞がれており、エレベータを見たクッパが何度も開ボタンや階ボタンを押しても反応しなかった。

ワリオ「…まるで俺様達の救助を困難させるような…計画的にやったような気がするんだが。あのセキュリティも偶然とは思えない…」

クッパ「何！？…それじゃあ、吾輩達が退かした瓦礫の一部も…もしも吾輩達のすることを読まれているのだとしたら…！？」

ワリオは額に人差し指を当てて少量汗を流しながら、困惑した表情で先ほどの事を思う。

クッパもワリオが言った突然のセキュリティ発生、道中の行く手を阻む不自然な瓦礫の位置のことを…額から汗を流しながら思った。

ルイーダ「…とにかく考えるより、早く助けに行こう！！なんとかしても、地下に行かなくちゃ！」

ルイーダがとつさにやるべきことを言い、ワリオとクッパはルイーダの言葉に顔を少し下げて頷いた。

ワリオ「ふんっ、日蔭者が言われなくてもわかっておるわい。」

クッパ「そうだな。手間が掛ってしまいが、吾輩らの手で瓦礫を退

かしながら進む他にない。…永遠の二番手のくせに（ボソッ…）  
ルイージ「ちょっと！（汗）永遠の二番…いえいえ、日蔭者って言  
わないでえ！！（涙）折角の僕の良いところがあぁ…うわぁぁん。  
orz」

ルイージは両膝を折って左手を床に付けて、もう片腕を何度も床に  
叩きながら滝のように涙を流して落ち込んでいるのだ。

まあ、そんなことは置いといて…（ヒドイな作者（笑））

ワリオとクッパは地下へと続く階段が塞がっている瓦礫を、手で退  
かしていた頃…

ヒュウウウウ…

ピーチ「周りが赤…赤…赤だらけで怖い…わ。けれど、見つけなく  
ちゃ…」

桃色の傘片手で持ち桃色のドレスを着た姫君「ピーチ」が、上空か  
らピーチ姫限定だけ与えられた特殊能力「空中浮遊能力」で、北範  
圀を広く巡回しながら生存者を探していた。すると…

？「グオオオ…オオン？（どうだい姫さん。見つかったか??）」

ピーチ姫の隣へ向けて飛行しながら近寄って来る、尾に炎を宿しオ

レンジ色の体を持った大きな竜「リザードン」が寄って来た。

ピーチ「いえ、まだ見つかってはいないわ。北側の<sup>ヨコ</sup>周りを空から何度も見ているけど…」

マスターがネスのテレパシー能力を利用して戦士達の為に作った、<sup>ポケモン</sup>生物等の言葉が分かる通訳機<sup>テレパフォン</sup>で、隣のリザードンにピーチは話しかける。

<sup>テレパフォン</sup>通訳機はミクロ単位のサイズなので、外見から見ても分からないように設計されているのだ。

ただし、<sup>テレパフォン</sup>通訳機といえども人間の英訳等に対応していないので、改良版ができるまで待っていてほしい。(Scan1でネスとリユカの和訳がされてなかったのは、その理由である。)

リザードン「グオオオン。(なら、東方面へと移動しよう。そこに俺達と同じように探している「ピット」が居るはずだ…)」

ピーチ「そうね…。彼に会ってみて聞いてみましょう。なにか情報を持っているかもしれないし…」

ピーチは桃色のドレスの腰に付いている小型のトランシーバを手にとって、マリオとポケモントレーナー「レッド」に通信回線を繋げて報告する。

マリオ「…わかりました。姫様、お気をつけて…。」

ピーチ「有り難うマリオ…。」



ポケモントレーナー（通称レッド）『…了解した。リザードン、生存者の探索とピーチ姫の護衛を頼む。』

リザードン「グオオオン。（分かっているぜ旦那。女を守るのは男の勤めだからな。）」

リザードンがそう言った後、ピーチは通信機を切り、隣にいるリザードンと一緒に東方面へと向かっていった頃…

…現実世界 英国 中央都市RZ 東方面 ショッピングモール  
内部 2階…

ゼルダ『リンク、ヨッシー、そちらはどうですか？？』

リンク「いや駄目だ。ここも…」

ヨッシー「あうううう。（同じくです…。）」

ゼルダとリンクとヨッシーは無線で連絡を取りながらモール内部の一つである、洋服売り場？らしきところで探索していた。

リンク「呼吸音すら聞こえていない…聞こえているのは嘆きと、何の感情もない風だけなんだ。」

洋服具売り場に千切られた腕と頭が割れた積み重られた死体達を一時目を閉じ両手を合わせる。

リンクとヨッシーは少し通信相手であるゼルダに少し話した後、腰

に付けてあるトランシーバーをオフにして洋服具売り場を後にする。

リンク「本当にクソツタレだ…こんなことをした奴をつ…！」

ガンッ！

リンクは怒りの感情のばかりに、近くに転がっていた空のごみ箱を、右足先で思いっきり何処かへと蹴っ飛ばした。

その後に血が付着していない壁に右手を当てて、目を閉じ顔を下へと向けて俯くような形を取る。ヨッシーは瞳を半分閉じながらリンクを気にするかのように傍に寄る。

トランシーバーをオフにする前に、ゼルダが言った一言を…

見つけたのですか…貴方トモダチの仲間を…

リンク「…。」

ヨッシー「あうう。（もう…ボクたちが来た時、もう……。）」

クッパ達が病院内へ入る数時間前、リンクチームはモールに到着した時、あまりにも内部が広いため探索時間を縮めるためにリンクとヨッシーは、個別の階ごとに分けて散開させたのだ。

地下一階にいくガノンドロフとMrゲームウオッチ、一階を見回すオリマーとロボット、三階に行くゼルダと四階に行くサムスとファルコンと別れて、二階の用器具店が並んでいるフロアへと入りこん

だ。

…回想 東方面 ショッピングモール内部 2階 用器具販売フォ  
ール…

リンク「おい！誰か生きている奴、返事しろ！！」

ヨッシー「ヨッシヨッシ！！（助けに来ました！返事をしてくださいー！！）」

リンクとヨッシーは大きな声を掛けながら、所々に千切れた腕と半分無くなった頭が四散している用器具専門店のフォールを探索する。

オオオオオ…グチャ…グチャ…

しかし返ってくるのは不<sup>ソレ</sup>死者のような声がする風音のみで、床にこびり付いている血や破れた大腸・小腸・肝臓等を踏む音で寧ろ…

故郷の危機を救った百戦錬磨のリンク・幼いマリオから今までずっと見守ってきたヨッシーでも…

それとは違って、彼らの空想世界には無い「恐怖と絶望」が現<sup>リアル</sup>実的にだんだんと内から増してくる。

リンク「（くそ…俺の故郷にどこらでもいるモンスターと何度も果敢に戦っているとはいえ…これは別物だろ…）」

ヨッシー「あうう…うう！！（…ボクの故郷に居る、ウンババよりも怖いですう！！）」

ピチャツ…

天井に付着した大量の血痕が、雨上がりのような雫のように床へと滴り落ちる。だが、歩みを此処で止まるわけにはいかない。

スマッシュブラザーズ  
彼らは戦士。力なき人々を助け、悪しき者を叩き潰す正義の軍。その誇りを汚すわけにもいかない…今でも救いを求めている人々がいるハズだから…

トンツ…

リンク「ん？…ヨッシー？？」

リンクの背中に、何かが当たる感覚を覚える。顔を後ろへと向けると、ヨッシーの顔がリンクの背中を擦りつけるように寄っていた。

それだけでなく、リンクの緑の衣を両手で掴み、思いっきり力を入れて緑の衣に皺ができるほどしがみ付いていた。

ヨッシー「ううう…（少し…だけでいいです。こ…このままでいさせ…てくだ…さい。）」

リンク「っ…。」

背中にブルブルと振動が走る。…ヨッシーは周りの地獄のような風景で恐怖し、震えているのだ。

リンク「（こんなに脅えて…俺も正直、メチャクチャ怖い…こんな世界じゃあ、一人でも正気に保てそうにねえよ。だけど…）」

リンクは心の中でそう呟いた後振り返って、震えているヨッシーの下半身から頭部までそつと左手で摩り、両手だけでなく体全体を使って、両足を折って半立ちになり、ヨッシーの体を優しく包むように抱きしめる。

ヨッシー「あう？（リ…ンクさん？？）」

リンク「脅え…るなよ…俺だって怖いんだ。俺の手を見るよ…ほら…」

ヨッシーは目だけ動かして、自分の体を掴んでいるリンクの手を見ると、手が僅かに微動しながら蠢めいている。

勇者とか戦士でも関係なく…リンクも人間の一人として、周りの世界に恐怖し、怖がっていたのだから。

リンク「怖いのは当たり前さ…この煉獄のような世界の中で懸命に…探している仲間も…同じ思いをし、感じているから。だけど…」

地獄のような世界にいてもリンクは穏やかな表情で、半分涙をため

込み今でも泣きそうになっているヨッシーを、見つめながら言う。

リンク「一人だったら絶対に耐えられない。だが俺達は複数いるんだ。…仲間が近くに<sup>ヨッシー</sup>いるだけで安心するんだよ。」

ヨッシー「あう…（リンクさん…）」

リンクの真剣な眼差しで、ヨッシーは掴んでいる手に若干力が自然に弱っていくのを感じる。それだけでなく…

体全体にガタガタと震えていた恐怖さえも、鎮っていく感覚も覚えたのだから…。

ヨッシー「ヨッシー…（リンクさん…ボク……）」

リンク「大丈夫かヨッシー？まだ、震えがあるなら…もうちょっと…宥めたほうが、いいかな??」

ヨッシー「ヨシヨシ。（もう大丈夫ですよ。あ…ありがとうございます。ます。）」

リンク「いいさ、乱闘以外俺達は仲間だからな。」

リンクがそう言った後、ヨッシーの頭を数回摩って立ち上がろうとした時…

…。

リンク「！」

ヨッシー「ヨシ？（どうしました？）」

リンクが突然右手を右耳へと寄せながら、顔を周囲を見渡すような動作を取ったのを見て、ヨッシーは啞然としながらリンクに向かって言う。

リンク「声が…。」

ヨッシー「ヨ…ヨシ？…！？（声？…え！？）」

ヨッシーも首を下へと下げて注意深く耳を澄ませると…

………て。

ヨッシー「あう…。」

リンク「静かに…」

無音に近いが、決して彼らに聞こえないわけではない。さらにリンクとヨッシーは静かに耳を澄ませる。

け……て

……す……。

…た……。

リンク・ヨッシー「…。」

… た … … … す … … …  
… て … … …

ヨッシー「ヨッシー！！（リンクさん！！）」

リンク「ああ、聞こえた！！ここか？！？」

バシャバシャ…

床に水たまりのように付いた血痕の上を踏みつつ、二人はかすかな声が出た方向へと瞬時に全速力で駆け巡る。

リンク「（声から聞くと、だいぶ弱って来ているな。だが！！）」

ヨッシー「（まだ間に合うハズ…です！！）」

バシャバシャバシャバシャッ！ガコッ！！ブチュッ！！！！ブチッ！！！！

床に落ちている壊れた器具や千切れた腕の一部や臓器を、氷の上で滑るように猛スピードで走ってきたリンクとヨッシーの風圧で、大きく横へと吹き飛ばす。



曲がるところで互いに右足を軸代わりに前へと伸ばし固定した後：

バシャシャシャシャ！！！！

床に滴る血の海を弾きながら、全身を捻るように捻じって急ブレーキを掛ける動作を取った。

リンク「見つけた！！」

目の前に用器具の陳列棚が折り重なるように、倒れていた中間部分に…

？「…たい…よ。…た…すけ…て。」

左腕の部分と右額部分から血を流し、用器具の陳列棚に挟まれ場所はやや薄暗かったが、

夕方の交流会で出会った栗色の髪を後ろへと流し、オレンジ色の服を着た子供がそこにいた。

子供A「いた…い…よお…。…い…たい…。」

リンク「デイル！！もう大丈夫だ。今退かしてやる！！」

リンクはすぐさま挟まれている子供、「デイル」の名前を言って数歩走り寄ったが…。

リンク「！！」

ヨッシー「ヨシヨッシ…あうー！！あうう……………（どうしまし…あ…。」

ああ……」

突然止まって、ヨッシーは何事かとリンクの元へと寄った時…

デイル「いた……い……い……たい……よおお……。」

リンクとヨッシーは目の前の光景に、驚愕した。

全身に急激の震えと、両眼が飛び出してしまうぐらいに大きく開いて…

二人は氷のように固まっていた。

その理由は…

遠くから暗くて見えなかった物が、近ずくと見える床に刺さった鈍器…

巨大な鉈が、デイルの下半身斜め一直線に切断されていたのだから…

デイル「ああ……い……た……いあ……あいた……ああ……いいたい……  
……ああ……。」

ゴボツ…ズルツ……ズズズ……。

口から溜まっていた血を吐き出し、残った上半身から様々な臓器がヌルリと滑りながら出てくる。

リンク「っ！……！」

ヨッシー「あ……う。」

ディール「……に……い……や……ん。」

言葉は途中途切れながら、両眼から苦しみの涙を流し血に染まった片手を、固まっている二人に向けて弱弱しく伸ばす。

リンクは心の底から湧きあがる後悔と救いきれなかった思いに、半分顔がくしゃくしゃになって涙を堪えながら、血に染まった手を握り締める。

ディール「……い……な……ないで。」

リンク「……の……む。……やっと……見つけたのに……なんで。」

握り締めている朱に塗れたディールの手が、段々と冷たくなっている感覚……。

それはまぎれもなく、永遠の眠りへと誘うものだった。

ディール「……う、……け……を……握れ……」

いよ。… さ…い。」

リンク「お…い、何言ってる…んだよ。大きくなっ…たら、俺と一緒…に、人の為…に剣を握ろうと…言っただじゃねえか。」

ヨッシー「ああ…う。」

パタタ…

ディールの右頬に雫が零れ落ちる。リンクはついに耐えきれず閉じていた瞳から涙を流し、言葉は嗚咽で途切れながら顔を下へと向け何も出来ないままディールの手を握り締めていた。

ディール「よ。… …お、… …や…

ん。… …ま。」

リンク「やめ…ろ…閉じるな…。…閉じ……るんじゃねえ!!」

スウ…

リンクの言葉は虚しく、ディールの瞳が段々と閉じていき…

パシヤツ…

伸ばした手が静かに血に染まった床へ力なく落ちる…

リンク「おい…どう……したんだよ…なあ…ディール??」

そこら辺に転がる苦しみの表情でもなく、穏やかな表情を保ったまま…

永遠の眠りへと旅立っていった。

リンク「やめろ……よ。おい、デ……イル……何か言えよ……。おい……おい……！」

リンクは半分冗談めいた表情でディールの顔や肩を手で何度も摩る。

何度も摩っても、二度と語ろうとしない……。

もう二度と、動こうとしない……。

もう二度と、瞳は永遠に開かない……。

リンク「うああああああああああ……！！！！！！」

リンクは顔を上へと上げて、故郷を救う冒険さえなかった後悔と絶望を込め、声が枯れるぐらいまでに大きく叫んだ。

…現実世界 英国 中央都市RZ 東方面 ショッピングモール  
内部 2階 廊下…

リンク「ちく……しょう。……畜生……。」

ヨッシー「あわわ…う（リンクさん…。）」

リンクの閉じられた瞳には涙が溢れ、雫が雨のように床へと零れ落ち、体を壁に擦りつけるような体形になる。

リンク「何で…俺達…　こん…なとき…だけ」

無力なんだろう…。

ところどころ嗚咽が出る中、己の無力さを心の中へとため込んでいた時…

？「何を悲しんでおるのだ、小僧。」

リンク「つつ…！！！！…あ。」

ガッ…

リンクの腰の辺りに固い物が、背中から強く巻き付く痛み感覚を覚える。よく見ると鍛えられた腕であり、吹いている風でマントのような物も見える。

耳元に聞こえる声と今の状態は何なのか、もちろん理解できるのに時間が掛からなかった。

リンク「ガ…ガノ……ンド……口フ。」

ガノン「何故泣いているのかは我には理解できん。だが、これだけは言っておこう…。」

ガノンドロフが壁に凭れ掛かっているリンクを、無理やり片腕で抱き起し、真剣な表情で前を見る。

ヨッシー「あ…う？（ガノンドロフ…さん？）」

？マークが頭部に浮かんでいるヨッシーを余所に、ガノンは顔を正面から上へと向けて、上空に浮かぶ赤い月と赤い空を細い目で見ながらこう呟いた。

ガノン「何時までも陰を引きずるままでは、何人も救うことすら叶わぬ。一つの陰の存在がある限り、己の使命さえ狂わせ、伸ばした手を掴み取る気力さえ消してしまう…厄介な物よ。」

ヒュオオオオ…

生暖かい風が黒いマントを靡かせ、漂う死臭がリンク達の肌に擦り付く。リンクは涙で赤くなった両眼を自分の体を抱きしめているガノンの腕を見ると、少しばかり震えていた。

リンク「（震え…て…いるの……か？）」

ガノン「黄昏時…我は人間と共に酒を飲み交わす約束、…それすら叶わなくなってしまった。唯一の余興が見知らぬ存在に奪われたことに…」

リンクはガノンが言う言葉を聞く度に、大きく出ているのを感じ  
る。顔は後ろを向いているので表情は分からないが…。

怒りと苛立ちを腹の底から、全てを外へ叩きだしていた。

Mrゲームアンドウオッチ（通称ゲムオ）「憤リト怒リヲ、ガノン  
サンモ、私モ…皆、腹ノ底カラ出シテイルノデスヨ。決シテ貴方ダ  
ケデハアリマセン。ダカラ…」

…一人デ怒リ、哀シマナイデクダサイ……。

ポンツと、リンクの肩にゲムオの黒い平面の手が軽く叩く。正面か  
ら見ても真っ直ぐの黒い棒しか見えないが…

その言葉は初期仲間の一人「ネス」と同じように暖かく、リンクの  
中で渦巻いていたこの世界での、深き闇の絶望と後悔の鎖が解けて  
いく。

リンク「ウオッチ…俺は……。」

ガノン「あ」…その、何だ…。何て言うか…う」ん。」

ガノンドロフが片手で額辺りを数回搔いて一瞬頬に赤みが出たもの  
の、何かを言いださそうとするがなかなか思うように出ず、眉を細  
めながら少量汗をかく動作を取る。すると…

？「我らは頼りがある『仲間』だから、一人で深く悩み、一人で  
他人の為に心を傷ついて、一人で感情を思うままに元凶の元へと走



つてはならぬ。」と言いたいでしょう？ガノン君？？」

？「ソウデスヨ。アナタノ持ツ「ヒト」ナラデワノ人情ノ姿ナラ、ソウ言ウデシヨウネ。」

リンク・ガノン「え…？「む？」」

ヨッシー・ゲムオ「あう！（あ！）「君たちハ！！」」

第三者の声がした方向へ体を向けると、一階方面を探索していたオリマーとロボット（通称エインシャント）が居た。

ガノン「む？一階を探索してたではないのか？？」

ヨッシー「ヨッシ？？（どうしてここに？？）」

ガノンは一先ず落ち着いたリンクを離し、リンクは「うわっ」という声をあげて不安定な姿勢の影響が少し体がよろめいたが。

近くにいたヨッシーとゲムオの両手でリンクの両肩を掴み、よろめき倒れを防ぐ。

オリマー「一階の全てを見回ったのだが、ほぼ全滅状態だった。もう私達から見ると、生存者はもう0%に限りなく近い…しかし。」

ロボット「ガノンサントウオッチハ、ソレヲ承知ノ上デ地下カラココヘ移動シタデシヨウ。ゼロ二近イ存在デモ、僅カナ可能性ヲ求めテ…。」

リンク「そうだったのか？…ガノンドロフ。」

ガノン「／／／！！」

リンクがガノンのほうへ顔を向けると、ガノンは少し恥ずかしそうにリンクの顔から横へと向けた。

リンク「あんたのような奴でも、そんな感情があつたんだな。ふうん。」

ヨッシー「（これは意外ですねえ！。）」

ガノン「（むうううう、貴様ら…我をそんな目で見るな！！余計に我自身が丸くなったではないかああ！！あの時の我は遙か彼方へと何処に逝つて…むむむむむ（困惑））」

ゲムオ「アハハ！ソナニ恥ズカシガラナクテモイイノニ！！」

ロボット「フム、人トハソナニ隠レタモノガ…後デワタシノ脳内デ―タニ追加シテオコ（ボソツ）」

オリマー「それでは、私の下僕<sup>ヒクミン</sup>観察日誌にでも、余分に書いておきましようかねえ…（ボソツ）」

ガノン「（愚民がああ！！（怒）余計なことを追加しなくてもよいわい！！（汗））」

ガノンがからかわれている四人組に心の中でそう呟いていた時…

ピピピピ。

五人組一同「（受信？）」

ガノン達の腰の辺りに付いていた、トランシーバーから受信音が響き渡る。一同は腰に付いているトランシーバーを手にとって、耳辺りにトランシーバーを翳して同時に通信ボタンを押す。

ファルコン「おい、お前ら！直ぐに四階に来てくれ！生存者発見したぞー。」

リンク「え…生存…者？」

ガノン「なんだと？」

ヨッシー「ヨシ！？？！（なんですつてええ！？？！）」

ファルコンの能天気みたいな声を聞いて、リンクは驚いているガノン達を余所に握り絞めているトランシーバーに少々力を込めながら、涙を流した後の掠れた声で通信相手のファルコンに言い返す。

ファルコン「だあかああら、生存者が居たって！！俺とサムスがいち『イチヤパラ言っなああ！！音速マッチョ男！！！！』うぎゃあああああ！！！」

ゴスッゴスゴス！！！！…と鈍い音が数回トランシーバー越しに新鮮に聞こえた。

五人組は聞こえた鈍い音で、向こうで何が起こったのか直ぐに理解し、額から頬まで冷や汗を流しながら顔が真っ青になる。

サムス「もう！…話戻すけど、エレベーターの中に数人閉じ込めら

れているの。』

ガノン「それなら、我らが行かずとも貴様ら二人の力でなんとかするだろう?」

ファルコン『いててて…ひどい目にあった(涙目)簡単なことを言うんだなアンタわあ…。(汗)それが、どうもうまくいかなかったね。』

リンク「どういうことです??」

リンク達が通信相手であるサマスから変わったファルコンに、頭部に?マークを浮かべながら言い返す。

サマス『下手に力で無理矢理こじ開けようとすると、中にいる人達まで影響が出てしまうのよ。』

ファルコン『それに中に子供もいるんだ。幾ら俺やサマスでもあやしても、全然泣き止まないんだよ。』

リンク達はトランシーバー越しに静かに耳を傾けると、雑音と混じって何かが叫ぶ声が聞こえる。リンク達は瞬時に四階で起こっている状況を把握した。

ロボット「ワカリマシタ、今スグ貴方方方方へ参リマス!」

サマス『出来るだけ素早く来てほしいわ。こっちも、「酷い有様」を私達の心を抉り取るように味わっているんだもの。』

ゲムオ「ソレモ私達ト同ジ思フ持ッテイマスヨ、サマスサン。マダ

コレデモ、序盤ニスギナイト思イマス。哀シイ出来事ヲ私達ノ眼デ味ワウナnte、モウコリゴリデスカラ。」

ファルコン『ああ、もう沢山だぜこんな現状なんざ…リンク、三階にいるゼルダにも同じように連絡しておくぜえ！。』

リンク「ああ、頼む。」

リンクがそう言った後、ファルコンが「おう！」と言った瞬間、トランシーバー越しに聞こえる雑音が途切れた。四階にいるファルコン達が通信を切ったのだらう。

リンク「さて、四階に行k…うわっ！??」

突如、リンクが走ろうとした時、不意にバランスを崩して、床へと倒れこむ。リンクは両足に力を込めて立ち上がるうとしたが…

リンク「（何でだ??何故こんな時に俺の脚が立てないんだ!!）」

自分の足はなんともないように付いているのに、足の神経だけが麻痺したかのように覚える。

まるで自分自身の足が鋭い刃物で一瞬に切断され、痛みの感覚さえ無いような感覚を…

ガノン「どうした小僧!？」

ウォッチ「ドウシマシタ、リンクサン!!??」

リンクの声に気付いたのか、ガノンとウオッチらが振り向いてリンクの元へと走り寄る。リンクは一瞬頬を赤く染め、長い耳を下へと垂れながら恥ずかしそうに言った。

リンク「ちょ…つと情けないけど、足がすくんで立てないんだ」立てぬなら、早く我らに言わんか。」うわぁ！？?!」

ひょいっ！と、リンクの言葉を言い終わらない内に、ガノンがムスっとした表情でリンクの体を掴む。リンクはひょんとした声をあげて、ガノンはリンクの体を両手で軽く持ち上げる。

見た目の状態からだと「お姫様だっこ」である。

ヨッシー「ヨシヨシ。（ガノンドロフさん。）」

ガノン「わかつとるわい夜ッ死威威。」

ヨッシー「ヨッシー！ヨッシヨヨッシー！！」「ヨッシー」です！そんな変な漢字に無理矢理変換しなくてもいいですよ！！」

ガノン「五月蠅いぞ両性爬虫類が。」

ヨッシー「がるるるる！（ボクは男です！どこぞのピンクの恐竜のようなオカマじゃないです！！）」

ウオッチ・オリマー・ロボット「（わざわざ古臭いネタを、こんな状況でつかうなよなぁ。（ツッコミ））」

ネタが古いセリフをヨッシーに向けて吐くガノンドロフに向けて、  
ウオッチとオリマーとゲム才は心の中で突っ込んだ。

ガノン「ほら小僧。」

リンク「わわわっ!!?」

ドスンっ!と、鈍い音が鳴り、ガノンは抱きかかえているリンクを、  
ヨッシーの背中に付いている鞍に向けて乗せた。

ヨッシー「ヨシヨシヨッシー!!(ちょっと、ガノンドロフさん!  
!荒々しく僕の背中を叩きつけるような、乗せ方しないでください  
!!)っか、痛かったですよ!!)」

ガノン「無理を言うな両性爬虫類。それでも力を抜いているんだが、  
上手く制御できぬのだ。」

リンク「(俺の世界でアイツと戦った時、もうかつての極悪非道と  
は思えないな…。多分……アイツの本心は……)」

ガノンはリンクをヨッシーの背中に乗せた後、背を向けて数歩離れ  
る。リンクはガノンの言葉を聞く度に、彼本来の優しさを中へと閉  
じ籠めている…否、出したくても出せない悲しさも感じ取れる。

リンク「(心があっただろうな…。)」

ガノン「何ボサツとしておる、さつさと最上階へと逝くぞ。ヤツラを長々と待たせてはらなぬからな…。」

フツ…

ヨッシー「わう！？（わわわっ！？）」

ゲムオ「（字ガ一部違ウガ…（ツッコミ）」

一瞬の風がリンク達を横切り、風圧でヨッシー達の体が不安定に揺れる。ヨッシー達は足に力を入れ体制を立て直した後、顔をいたるところに振り回すが、数メートル先にいたガノンの姿がない。

オリマー「あつ！ちよつと！！待ちたまえガノンドロフ君！！」

ロボット「アンナトコロマデ…全ク…。」

呆れながらの声が出る中、オリマーとロボットの顔が逆の位置に向けている。ヨッシーとゲムオはその方向に合わせて顔を向けると、ガノンの姿は三階の渡り廊下に立っていた。

どうやら大ジャンプで三階の渡り廊下まで跳躍したらしい。

リンク「ヨッシーいいのか？…俺これでも…」

ヨッシー「ヨシヨシ（大丈夫ですよ。ボクはマリオさんの赤ちゃんの頃から、ずっと背中に乗せていますので、心配は要りませんよ。それに…）」

リンク「ん？」



ヨッシーの顔が背中に乗せているリンクに向けて振り返り、微笑みが満ちた表情でリンクに向けて言った。

ヨッシー「ヨッシー。（ボクも仲間の一人として、一人一人大切に守りたいんです。悲しみも全て受け入れて、それから…）」

ゲムオ「元凶二命トハドレホド大切な存在カラ、私達ナリデ教ヤルダケデス。」

オリマー「そうそう。それだけだなく、私達の斑「リーダー（リンク）」を私達はどの方向から見て、状況に応じて気遣っていることをお忘れないように。」

リンク「みんな…。」

ロボット「「リーダー」トモイエドモ、貴方ハ私達ト同ジ「ニンゲン」デスカラネ。「人間ノ特権デアル感情ノ存在ガアル限り、人ハ最も軟弱デ、心モ体モ脆ク壊シ安イ貧弱ナモノダ。」ト、ドツカノ誰カサンガ言ツテイマシタガ…」

ボフンツと、ロボットの足元に付いていたロケットエンジンに火が点火して、リンク達に聞こえないぐらい小さく呟きながら、数メートル空中に浮かび上昇していく。

そしてリンクを乗せたヨッシー、ゲムオも崩れた壁が盛り上がったところを使いながらジャンプして飛翔し、オリマーは背後にボサツと立っていた下僕達<sup>ベクミン</sup>に命令を与えながら上へと昇っていく。

ロボット「（…ソナノハ、勝手ニ決ツケタモノニシカ見えナイ。  
…私ハ全テノ命ヲ使ツテモ…絶対ニ否定シ続ケマス！…ソウデショ  
ウ…）」

ネスサン…。

ロボットの脳裏に映った仲間の一人…スマッシュチルドレンリーダー子供軍団筆頭「ネス」の、普  
段の日常で出している笑顔を思い浮かべながら、心の中でそつと呟  
きながら後をつけてくるヨッシー達を率いて、四階へと目指してい  
った。

…現実世界 英国 中央都市RZ病院内 1階…

グシャツ。

ワリオ達が居なくなつたナースステーションの中に、複数の原型を  
とどめていない死体達を踏み立つ、全身に白いローブが掛つた長身  
の人間…

否、ローブの下から人には無い物…長い紫の尾が出ていた。

？「愚かな…貴様らが求める「希望の光」など、とつくに私が奪い  
去つたと言つのに…」

無駄に時間を削つてまで、貪るように探すつもりなのか？？

バチッ！

生きているパソコンの前を白い手で差し出した時、パソコンの本体全体に青白い電流が、竜が狂ったように暴れているように走る。

？「今にそう思っているがいい……お前たちが持つその希望が……。」

本当の絶望へと変えてやろう。

その後、液晶画面がグニヤリと捻じ曲げられたように不気味にうねり始め、画面中心部分に途切れかけたメッセージアイコンが出てきた。

パソコン画面「Addition: all program  
: virus is cutted. There is  
a possibility that the main  
body is destroyed when this pro  
gram is executed. (追加プ  
ログラム「ウイルス」を実  
行します。このプログラムを実行  
本体そのものが……される可能性  
があります。)」

さらに、メッセージが続きその下あたりにメーターのような物が現れ、メーターの枠に青いアイコンが一つ付く。

パソコン画面「virus is transmi  
tted to the controller. This  
program cannot eliminate  
the infection. (「ウイルス」を制御  
へ送信し……。なお、このプロ  
グラムは中断キヤセル出来  
せん。)」

ピシッ！シュウウウ

急激のプログラムで熱を追いつけず処理が追いつかなくなり、熱を追いつけず穴からモクモク煙が出始め、画面に張ってあるガラスに罅が走る。

パソコン画面「The trans... mission comp  
... on will be done in ... hours .  
Please wait for a ... every m  
h . ... It repeats . This pr ... m ( ... 時  
間 ... 後に送 ... 完了 ... す。大分 ... らくお待ち ... さい。 ... 繰  
り返します。このプログ ... )」

ブツッ！...ボウッ！！

遂にパソコン本体がイかれて、煙がところどころ噴き出ながら画面がブラックアウトになり、火が画面のガラスを突き破って中のコード等がむき出しになりながら噴き出る。

パチッパチチ...

床に散乱していたカルテ等の紙に火が付いて、ゆっくりと焦がしながら燃え広がる。

？「時間が来た...そろそろ名乗り出よう。」

我が弟子に...

ブツツと、回線が切れたような音が鳴り白いローブを覆った者は、もうすでにナースステーションから消えていた。

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
s  
.  
.  
.

# Scene 4 The world of purgatory with

あの人をようやく出しましたが、終盤しか出せませんでした…。

(謝罪)

次回からはネスさんと、マルスとあの人を大量に出す…つもりです。

更新は同じように遅めです。しばらくお待ちください。

**S c e n e 5   R a i n   o f   s o r r o w   t h a t   f a l l s   i n**

ようやく更新完了。(汗)

ちよつとホラーな表現と残酷描写があります。

閲覧ご注意ください。

S c e n e 5   R a i n   o f   s o r r o w   t h a t   f a l l s   i n

空から堕ちる悲哀の雨

そんな中一人の少年は尊敬する者を疑い

心の底に溜まっていた本音を言い放つ。

その者は過去の残像を見ながら…

中に住まう本来の己の姿を見て

静かに笑い、そつと誤魔化す。

…現実世界    英の国    中央都市RZ    南方面    住宅街…

ネス「おいっ！誰かいらないのか！？」

リュカ「あっ！…ちよつ、先輩（汗）け…蹴り壊さなくてもよかつ  
たんじゃ（汗）」

ドカツ！

住宅街の一つである民家に、ネスは酷くひしゃげた玄関を蹴り壊して中に入り、リュカもネスの後を追って、中へと入っていく。



ネス「shit: Even the burglar entered. To it: (チツ:強盗でも入られたみたいだぜ。それに...)」

リユカ「Before one is aware, it is likely to become "English" that we use why?... It doesn't worry. Now: (何故、僕らが使う「異国語」にいつの間にか:なっているでしょうね?...それは置いといて、今は...)」

民家の中は外と同じように物置等が散乱しており、ネスは異国語を言い漏らしながら廊下を歩く。

ギシギシ

廊下を歩く度に、床の木が腐る手前のような不気味の音を立てる。

今ネス達がいる住宅街も広く、集団探索だと時間と手間が掛かるのでネスは分散させ単独探索を取るようにと指示した。

ソニックとカービィは北のマンション街へ、プリンとピカチュウは西側河川敷住宅街へ、タウンとアイスクライマー（ポポとナナ）は東側の段差がある住宅街へと...

そしてリーダーであるネスと弟子のリユカは、南側の割れた大地の壁に建てられている地下住宅街のどこにでも見かける一軒の民家中へと堂々と入って、探索している最中である。

リユカもネスに釣られて異国語を吐き、顔を恥ずかしそうに下へ向けて一瞬赤く染まった後、リユカの表情は目の前にある到る所に血痕が付着したドアを、真剣な表情で見つめる。

ギィィ…

ネスはドアノブに手を掛けて、ゆっくりとリビングらしき部屋へと開ける。

リュカ「oh…no.」

リビングの中は大量の血痕と糞が到る所に四散しており、無残な死体のところに複数の鼠が死者の肉と血を齧っていた。

リュカは一瞬だけ顔を歪め鳥肌が身体を過り、声をやや囁れたように内側から漏らす。

ネス「It is a state as cruel as the outside…」（酷え有様だな。外も中も…）」

ネスはリュカとは対象的に冷静な表情で、目を細めながら目の前の惨劇を黒い瞳にじつくりと映す。

完全に原型すら分らないほど破壊された元テレビ、キッチンルームだった物…

人の体の一部が割れたガラスの欠片達に紛れ込んでいたり、酷く崩れたテーブル・タンスの上やら、所々にばら撒かれていた。

ネス「（これだけ短時間、ここまで手を伸ばすとは…どんな方法でやり遂げたんだ??）」

ネスは頭を傾げ口元に右手をやや丸め当てながら、脳裏に疑問を思

い浮かべながらリビングを後にする。

リュカ「先輩……あの……、一つ……聞いてもよろしいですか？」

ネス「何だ？」

血で赤く染まった階段を何んともしない足取りで上つていくネスを見て、リュカはPSIで体を浮遊させ体を覆う薄い緑色の光を零し追いかけながら、やや脅えた声で質問する。

リュカ「こんな……恐ろしいところにいるのに、どう……して平然としてられるんですか？」

バキッ……

ネスが二階のドアのプレートに書いてあった「ルーク部屋」……子供部屋のドアノブを手を掛けて少し廻した時、ドアノブが脆く壊れて扉が自然に開く。

子供部屋も一階のリビング・外と同じように、血痕と内臓・糞が部屋一杯まで埋め尽くしていた。

ネス「恐れたらまともに搜索できないだろ？集中すらできなくなるしそれに「先輩……本当に言っているんですか？」……リュカ？？」

ネスは所々肉体が引き裂かれ、蛆虫がわいた子供の死体を見ながら質問を返したが、途中リュカに言葉を遮られる。

ネス「リュカ、どうしたんだ？」

ネスは眉を細めて何事かの表情を出して、後ろにいるリュカに振り返る。

リュカ「常識的に可笑しいですよ。こんな世界に人間が平然としていられるなんて…ありえない話なんです。正直失礼なことを言いますが、先輩…」

リュカの言動は感情が入っていないかのように酷く冷たく、リュカの表情はロボットのように硬く眉も動いていなかった。

そしてゆっくりとネスに向けて唇を動かしていった。

リュカ「『普通』じゃないです。」

ビリッ…

ネスの脳裏に青白い電流みたいな物が走り、ネスの意識…否精神体は現実世界から遠ざかり、大きい体から小さい体へと変わって霧状へとなる。

負の因子が入った仮想空間へ入っていくと、その霧状は複数の子供達の囲いの中へ佇んだ。

子供？「…お前、普通の人間じゃないだろ？人間じゃない奴が何故ここにいる？？」……」

子供？「ホントホント。なんで化けモンが俺ら人間の世界に存在しているんだよあ??」

脳裏に白と黒のコントラストの世界の中に小さい複数の人影が、中心に佇んでいる小さい人影に向けて口ぐちに言い放つ。

中央にいる子供？「…違う！僕は君達と同じ人間なんだ！化け物なんかじゃない！！」「うるせえ喋るな、地球外生命体が！！」「…あつ！！」

中心に佇んでいた子供が必至な言動で困っている人影に言い放った時、ゴスツと鈍い音を立てて中心にいた小さい人影が脆く床へと崩れ落ちる。

子供？「クハハハっ！！嘘つくんじゃねえよバーカ。クスクス…」

ドッ！

子供？「嘘つきは泥棒の始まりって、僕のママが教えてくれたんだけど…宇宙人にはわからないか。くくく…」

ドカツ！！

複数の人影が、中央に倒れている人影に向けて笑いながら数回蹴りをかます。

子供？「そくだよなあ、俺らは知能溢れる二・ン・ゲ・ン様なんだもーん。」

ドスッ！

子供？「そうそう 宇宙人には知能っていうものすら、ないらしいね。アハハっ！」

ズンッ！グシッ！…

すると複数の人影が腰のポケットらしき物で隠していた刃物を、中央に倒れ伏す人影の所所に容赦なく突き刺す。

中央にいる子供？「う” あ！…ああ”…あ…う。…ぼ…僕は…」

中央に倒れ伏す人影の元から赤い物が広がっていく。

だが、到る所に血が流れても中央の人影は苦し紛れの言葉を吐きつつ、立ち上がろうとする

子供？「つけ！可らしい体だな、「それ」。なんで心臓付いたにさつさと死なないんだよ？」

子供？「普通脳天刺したら一発なんだけど…気色悪いなあおい？？ゾンビみてえ」

更にせせら笑い声を出し体の色んなところへ刃物が刺さりながらも、必至に立ち上がろうとする人影に向けてふざけた態度で言い放つ。

中央にいる子供？「ぼ…僕…あ…は、…にん…う…あ…げん…な…んだ…。」

子供？「…じゃあなんなんだよその現象はよお？」「そ・れ・は」「何なんだ？？」

一人の人影が人指し指を突き出して、中央にいる人影に向ける。

中央にいる子供？「え？…！！！！」

中央にいる人影が付きつけられている方向に、ゆっくりと目線に向けて…

中央にいる子供？「…こ…これは…」

中央に立っている人影が驚愕の声をあげる。

子供？「……人間っていう物すら見当たらねえなあ？お前…出身地は宇宙外だろ？？……」

背中から赤い霧状で生えた、竜のような巨大の両翼…

両眼が澄んだ漆黒の瞳ではなく、深い深海色の浄眼色へと変わっていた。

子供？「怪物だよ怪物。モンスターだ。」

…嘘だ！こんなの！！…

カランッ

体のいたるところに刺さっていた刃物が抜き落ち、乾いた音が一瞬響く。

子供？「まさに地球外生命体だな。ゲームと比べてこんなにリアルに見れるとはねえ」

グチッ…

…違うよ、僕の腕も…体もこんなじゃない！…なのにどうして！！  
中央の人影は何度も現実的に起こっていることを拒絶しても、体の所々に赤い光の線が無音に伸びていく。

子供？「全然違わねえよ。もうお前は化け物としてはっきりと証明されたんだ。」

…違う！…僕は！！……

メキッと肉が潰れたような音が鳴る。両足が五本足指ではなく、一瞬に竜族のような黒い三本爪足に変化した…。

…違う！違うんだ！！こんなの……

中央の人影は何度も現実逃避しても、伸びた赤い線の体の部分が変異していく。

子供？「否定しねーで自分の体をよく見ろよお。見ている側にして素晴らしいじゃないか。」

…違う！……ち……ち………違う！！ち……が………ち………がう！  
！…うあ……ああ”！！



グジュツ…変異されていない体の部分のところ ゆっくりと走り、線が無情にして隅までと伸ばす。

子供？「アハハ！立派なモンスターだ！！カメラが無くて残念だったけど」

…ああ”！……………う”ああ……………ああ”あ”ああ！！……………やめ”  
……………てええ”……………え……………

バキバキ…中の骨が砕かれた音が鳴り、人間の肌が腐り落ちるように赤く染まった床へと落ち、筋肉の組織がむき出しになる。

子供？「うはああ、スゲー。スクープにでも出せれるんじゃない？」

…か……………らだ……………の……………が……………

子供？「もし出せれたら、俺らスゲー賞金貰えるかもしれんぞ？」

…と……………とと……………ま……………ら……………ら……………な……………  
……………いい”！！

中央の人影が顔を上へと上げて痛恨の悲鳴…否

中央の人影「グルオオオオオオオ！！！！！」

中に封印されていた悪意な獣の咆哮をあげる。

ギユ…ギギ…

両腕部分の筋肉の組織が赤黒く硬質化し、刃物で傷が付いた部分が締めあがるような音で塞がる。

グチュ…ベキツ…

両肘から中間指と人差指爪の間に黒い溝ができ、指先の爪が異常ぐらいに鋭く伸びて黒く変色する。その瞬間…

ジャキツ！！…ズンツ！！

両溝から骨で出来た折り畳みブレードらしきものが現れ、中央の人影は腕を振るって周りを囲っていた人影を一瞬の内に横へ引き裂く。

子供？「アハハ！出たねえ…アンタの本性が……」

子供？「ウハハア 衝撃的映像だよコレ」

体が横へと両断されたのにも関わらず、人影達はクスクスと笑いながら床へと落ちていく。

子供？「これで君は、完全な怪物として証明できたんだ。クスツ」

カシツと、溝から出ていたブレードを刃物の音を静かに音を立てて仕舞い込む。

子供？「くくく…その姿、お似合いぜ？人間の姿よりも素晴らしいよ」

異形と化した中央の人影？「…」

頭部から生えた竜みたいな二つの角、浄眼の目もとから伸びる赤い線の光が不気味に光る。

中央の異形と化した人影らしき者は、いまだに笑い続けている生首達をP S Iで浮かせて首元まで上げる。

子供？「宇宙人の本来の姿だぁ！カッコイイぞ」

……れ。……

異形と化した中央の人影の姿が、最初は白と黒で分らない色から、段々と現実世界と同じように色が付いて明らかになっていく。

子供？「パパとママに報告したかったけど、足がなくちゃしょうがないよなぁー！」

子供？「まあ　これだけ言っておくか。アンタは……」

悪魔だ。

角が生えた短い黒髪に黒赤の肌、瞳は深海色の浄眼で、怪物の体と化した到る処に伸びている赤い線……。

それは幼い頃の自分……ネスのあの出来事のキツカケで……

人の体では無くなってしまったのだから……

悪魔だあ 悪魔だね。悪魔だ。悪魔さ。

…悪魔……

顔を歪めて体がだらけるような体制になる。脳裏に何度も聞きたくない三文字が、何度も繰り返しにエコーし心の底で沸々と湧き上がる恐ろしい物が上がって来る。

悪魔悪魔… やめろ… 悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔… おいつ！… 悪魔  
悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔… それを言うな！！… 悪魔悪魔  
悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔… やめろお… 悪魔悪魔悪魔悪魔  
悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔… やめつ！！… 悪魔  
悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔  
… ささ… 悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔… ま… 悪魔悪魔悪魔悪魔  
悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔悪魔… らあ ” ああ！！！！

悪魔化したネスの体の所々にヒビが入り、体を包み込むように両腕を巻く。

段々とヒビ割れた所から、不気味な赤い光が差し込んでくる。

悪魔化ネス「… 黙れええええええ！！」

グシャッアアアア!!

ついに限界点を超え、ダイナマイトでも爆発したように世界が一瞬の内で赤く染まる。

ブチッグチャ…ブチュジュール…ジュ…グチュ…

飛び散る赤い鮮血、人の腕と破れた肝…

悪魔は瞬時に口を開き、鋭い牙で人の頭を骨を肉を噛み砕き、口に入っていた臓物を吹き捨てる。

それでも飽き足らず刃を振りかざし、肉を引き裂いて思いのままに解体する。

もはや自分との意識とは関係なく、無差別に赤い花を咲かせ…本能のまま人の体を壊し…

そして最初から繰り返していく…。

全身が赤く染まるまで、悪魔は無差別に殺りつくしていった。

オオオオオ…

悪魔化ネス「僕は……俺は……人間なんだ」よ。」「決して……化け物じゃないと言っているのに……」じゃねえと言っているのになあ……」

どこからと不死者のような声のような風が吹き、血のような世界になった血の池中心に立つ悪魔。

少年と大人の声が交互に混ざりながら右手に握りしめている小さな人の腕を見つめながら言う。

悪魔化ネス「僕は……俺は……」

バシヤツ……

持っていた酷く千切れた小さな腕を投げ捨て、血で真赤に染まった顔を上にあげてそっと呟いた。

……  
。  
……、

……  
……  
……

リュカ「前からずっと思っていたんです。あの時先輩は右腕が失って大量の血を吐き出しても平然としていた……この時点で可笑しいん

ですよ！！まるで『死』そのものすら恐れていないように…」

ネス「…。」

リュカは顔を歪めながら下に向け、両手を強く握り締めてありのまに思ったことを、真剣に聞いているネスに向けて言い放つ。

リュカ「これは貴方と僕の戦闘経験とは関係ないですよ！！確かに先輩は僕よりかは長い経験と知識を持っているのは分かります！しかし、それとは別に…」

涙で歪んだ顔をあげて今だに戸惑うネスに向けて、目の前まで歩み寄った後本音をぶつけた。

リュカ「人間性の一つである『死の恐怖』が、全く無いのはどうしてですか！？」

ネス「っ…。」

ギリッ…

リュカの両手がネスの胸ぐらをきつく握り締め上げ、数回ネスの胸に向けて丸めた両拳で殴りつける。

そのあと涙でグシャグシャになった顔を、ネスの胸元へ横方向に数回擦る。

リュカ「普通は死の恐怖が恐ろしくて、誰もが生へと必至で足掻く

んです！なのに貴方は足掻こうとしない！生への固執が全く見当たらないんだ！！これではこれでもう既に可笑しいんです！！！！」

ネスは少し眉を細め静かにリュカの本音を最後まで聞き届ける。

リュカ「まるで貴方そのものが人であつても人ではないように、僕の世界にいた「キマイラ」のような雰囲気<sup>マシ</sup>が漂わせるんです！！……なのに、どうして……」

キマイラ……それは生きている者又は死した者の体に機械<sup>マシン</sup>を組み込み、植え付けた親の意のままに動く戦闘兵器。

かつてリュカの世界で、兄であるクラウドもキマイラ化されて自我を無くし、主である「キングPであること、ポーキー」に意のままに操られた。

世界を賭ける戦いの果てにクラウドは、戦いのさなか母とリュカの声を聞いてかつての自分を思い出し、自ら犯した罪を償うため自身に雷を放ち息絶えた。

リュカは自らの半身である「クラウド」と最愛の母を失い、針を抜いてからの平和になった世界で、彼はずっと仲間達に支えられながらも、心は何もない闇で孤独のままに生きていたのだ。

リュカは大量の涙で両眼が赤くなり充血になりながら、ゆっくりとネスに向けて顔をあげると……

リュカ「どう……して……貴方は……そんな素顔を……している……ので……すか？」



……まるで僕の……かあさんのように……

リュカの本音の中に嫌悪なる語が入っていたのに関わらず、ネスは少し微笑んだ表情で一瞬瞼を閉じた後、数回リュカの金髪を軽く右手で撫でる。

ネスの表情を見る度に、何度も亡くなる前の母の笑顔が重なってリュカの瞳に映る。

ネス「前から、リュカと同じように言った奴がいてな……そいつは天才少年のくせに泣き虫でね。何度も何度も地球を救う冒険中に言われたよ。「お前可笑しいじゃないか！」ってな。」

リュカ「……先輩？」

そう言った後ネスは、リュカを母親のように両手と両腕で抱きしめたまま、顔が無残に割れた窓へと視線を向ける。

ザ……ザザ……

外はいつの間にか雨が雪のように降っていた。まるで切なさが伝わってきているように……

ネス「長い冒険の末に、俺は過去の出来事を鮮明に思い出したのさ。優しさも……両親からの祈りも……それだけじゃなく……」

ネス「A negative back should go i

n the large crime that I committed in the past it is not possible to expiate this ahead.」

リユカ「！？（え…何なの…コレ！？）」

突然聞いたことがない異国語をネスが言って、リユカの体を掴んでいた両手をそつと放す。

リユカは両眼を大きく開きやや驚いた表情を出しながら、窓際に移動するネスを見続ける。

ネス「The tohubohu that people of the real world invented all catches, and is effective in everybody that much, too. …」

リユカ「（え…なんて言っているの！？…発音が古すぎて僕には…）」

リユカの脳裏内でネスの言語を和訳しようと必死で悩んでいた時、

ネス「要するに、仲間達でも決して云えない絶対の秘密があるってことだ。要はお前にはまだ早すぎるんだよ。」

…ス。…は、…たを…。

リユカ「（あれっ？いつの間に…）えっ！？…あ…そうですか…。

」

突如通常語に戻っていることに「はっ!？」と言って気が付き、やや笑みを浮かべているネスの表情を見る。

ネス「それよりも、まずは市民の生存確認が先だ。今はマリオが言ったとおりに救助活動をしなきゃいけないえだろ?？」

リュカ「あっ!…そうでしたね。じゃあ先ほど僕が言ったことは…忘れてください。今僕たちがやるべきことを優先にしていけないといけないし…。」

リュカがそう言った後、ネスは「ああ。」と言って割れた硝子をくぐって、軽い跳躍で隣家の硝子が割れていた二階部屋へと移動する。

リュカ「(何んだろうこの感覚、先輩の背中を見る度になんだか泣きそうになる…少し…だけ先輩の心の中から感じたけど…)」

リュカはP S Iで体を浮遊させ白い発光を出しながらネスの後を追いつ、ネスの背中を見るたびに切なさと悲哀が溢れ…

少女のような声も、リュカの心のチカラを通して聞こえてくる。

……幼い少女のような声が、聞こえた気がします……。……

…

……

……

…同時刻 現実世界 英の国 中央都市RZ 西方面 地下駅ステーション…

？「メタナイト殿、そちらはどうですか？？」

メタナイト『いや、特に変わったところはない。何処から見ても死体だけだ。』

一方変わって西側の漆黒に満ちた地下二階駅「Y字分岐点」にて一人探索している、蒼穹のマントと鎧と髪をもち腰に神剣携えた青年剣士「マルス」が、右耳にトランシーバーを当てて地下一階の通路にいるメタナイトに連絡を取り合っていた。

マルス「そうですか…また何か変わったところがあつたらまた連絡をお願いします。」

メタナイト『うむ…今雨が降り始めたところだ。手早くやらないと何処かに生きている生存者の体力が持たん。』

トランシーバー越しに聞こえる僅かな雨音。雨が降り始めるとなると温度が下がり始め、生存者の体温を徐々に奪っていくのだ。

たとえ雨が入らない地下に在るといえども、電気系統がやられて温度調節機能も停止しているので、徐々に地下の排気管を通して冷え込んでいってしまう。

マルス「ええ。こちらでも冷え切らない内に見つかればいいのですが…」

メタナイト『ああ…。』

ブツツと音が鳴って相手先の通信が切れたことをマルスは確認した後、節電状態モードに切り替え腰にトランシーバーを元あったところへと戻す。

マルス「（段々と曇り行きへとなってきたな…それに今いる場所は地下二階……）」

オオオ…

目線の先にある漆黒に満ちた線路状から、不死者のような風音が聞こえてくる。線路上には死体はないのだが死臭が何処どころもなく漂ってくる。

マルス「（此処が完全に冷え込むまでの時間が掛からない。そうだとしたら約4〜5分程度が生存者を助け出すタイムリミット…急がなくては！！）」

？「おーい！マルスうー！！」

突如気が抜いたような声が響き渡り、マルスは声がした方向へと顔を向ける。

マルス「ロイ、あの…ねもつと空気を読「えっ？？何て言ったんだよマルス。真剣に悩むと折角のイケメン顔がブサイク顔になるぜ」？…（怒）」

赤い髪に青い戦装束…暗闇の線路上からこちらへと駆け寄って来る声の正体はロイであった。

マルスはややムスつと頬を膨らませ、額にプッチンマークでも付いているかのように状況を読んでいない能天気の剣士に顔を向ける。

マルス「はあ…君は能天気すぎてこの状況をどう思っているんだか…ヤレヤレ（ボソツ）」

アイク「おいマルス…フォックス達が「分岐点のところまで来てくれ」と言っているぞ。」

その後が続いて、無表情のアイクも奥の暗闇から歩いてきた。

マルス「！…生存者がいたのか！？」

アイク「うむ、…なんだか「れっしゃ」の「どあ」が開かないんだとか…。」

マルス「？…フォックス達が持っている近未来的兵器とかで開けられるはずじゃあ…。」

ロイ「それがなあ、中に複数の子供と女がいるんだって。へたに武器で破壊しようとするとか、中にいるやつらまで傷ついてしまうんだとか。」

マルスはアイクとロイに導かれながら暗闇の線路上を歩く。少し…否数分歩いて行くと緩いコーナリングの辺りにジグザグに脱線している列車が見えた。

「ひどいね…。」とマルスが小声で漏らし最後尾辺りを見ると、非常用ドアを開くための作業をしているフォックス、ファルコ、ウルフ、スネークがいた。

フォックス「おっ…丁度いい所で来たなマルス。今最終調整に入っているところなんだ。」

フォックスがマルスにそう言った後、ドアの開閉作業をしていたファルコが「ちよつとやってみる。」と言って、隣にいたスネークが無言で頷き静かに何かしらの機械をドアに取り付けて操作する。

マルス「そうか。それで中にいる生存者の状況を…」

ウルフ「遅えぞナルシスト小僧。まあそれは置いて、コイツ（列車開閉機能）のせいかわからんが、旧式なんで作業が思った以上に難航なんだよ。それに中にいる餓鬼共が全然泣き止まなくてな、どうすればいいかと思っていたんだが…」

ウルフが状況をマルスに話していた時、スネークの細かい手作業でガシユツと音が立ち、緊急ドアが開いたかと思ったのだが…

ファルコ「ちっ…あれほど作業したのにこんだけか。」

スネーク「駄目か……思った通りに機能コイツが旧式すぎて最新版でもこれか…。」

やはり旧式の機械のせいか、スネークは両手を広げてお手上げのよきな仕草を取る。

よく見ると開いた間隔は、細いワイヤーが入れる程度の僅からセンチ程度しかなかった。

マルス「ファルコ、スネークさん…これだけしか開きませんか？？」

ファルコ「見ての通りだ。これが限界だぜ。」

フォックス「この列車は八車両のようだけど、七車両以降からサン  
ドイッチのように潰れているんだ…生存は無と言ってもおかしくな  
い…。」

フォックスが言った通りに七車両以降先を見ると、車両が次々と押  
しつぶされたように原型さえ分らないぐらい大破していた。

マルスは眉を細め額に皺を作りながら、かろうじて原型が残ってい  
る八車両の酷く拉げた窓の中の様子を見る。

マルス「（中はドミノ倒し状態か…それに中の空気も相当薄くなっ  
ているハズ。だとしたらこれしかない…）」

かろうじて生きていた人間が列車の横転により、所々呻き声をたて  
ながらまさにドミノ倒し如く折り重なるように倒れていた。

空気の出口は先ほど数センチ開いたドアでなんとか酸素は入るもの  
の、やはり一時的なもので手早く開けなければ生存者の体力・息が  
長くは持たない。

こうゆう状況を打破するために、マルスは一瞬のうちに思いつき取  
るべきことは一つだけだった。

マルス「手段は…これしかないか。」

ウルフ「っけ、やっぱりそう来るとは思っていたがな。…鍛えれば  
よかった（握力を）」



ロイ「へへっ、大分(?) 트레이ディングで握力を鍛えたから成果を出すチャンスだぜコレ」

アイク「ふんっ!! (鼻息を出しながら)」

ギギギギ...

マルス達は僅かに開いたドアのところに手先を入れて、開く方向へと持てる力で強引に引っ張って開けていた。

ファルコ「おい、蛇のおっさん!!ちゃんと力入れてんのか!?!」

スネークの隣にいたファルコが、やや苛立った言動で必死で引っ張っているスネークに言い放つ。

スネーク「これでも全力で引っ張っているんだが(怒)」

額にプッチンマークでも付いたかのように、寡黙ながらの持ち前の冷静の言動でファルコへ言い返す。

マルス「(もう少しで...)」

フォックス「皆...もうちょいだ。このままで...」

ギギ...

少しずつだが、徐々にドアが数センチづつ開いてきた。数センチ開いていく度にマルス達の瞳に希望の光が映る。

…同時刻 現実世界 英の国 中央都市RZ 北方面 高層ビル通り…

マリオ「うつしゃ！これで止血完了！！後は患者をできる限り動かさないようにして…安全に看病できる場所はつと…」

デイディ「あつ！それならマリオが僕らに連絡する前に見つけた「あの」場所にしようよ！！そこなら広そうだし。」

ドンキー「ウホホホッ！（あー、さつき見つけた丸い形の建物（公民館）か。中は確か荒らされてないような気が…）」

マリオ「賛成だな。じゃあ仲間達全員集合できる場所として…連絡を取ろう！！それとトリップゲートの位置を設定しないとない！！」

…同時刻 現実世界 英の国 中央都市RZ病院内 地下1階 手術室前…

ルイージ「もう少しで開きますからね。少し辛抱してください！」

クッパ「ワリオ…！早よ開けんか…！（ベッピン姉さんだと信じて興奮中）」

ワリオ「うるせえな、そう急かすなよ愚亀。あと30秒で解除できるから。（キーボードを高速で打ち込んでいる最中）」

…同時刻 現実世界 英の国 中央都市RZ 東方面 ショッピンモール内部 4階 エレベーター前…

ガノン・ファルコン「むぎぎぎぎぎぎぎ（エレベーターのドアをこ

じ開けている最中)」

オリマー「A + B B !!次はC + C B Z + Z + R L!!」(下僕<sup>ビクミン</sup>達に指示中)」

ゲムオ「ガノンサン、ファルコンサン、マダ0・05センチツツシカ開イテイマセンヨ。」

ロボット「アト0・5パーセント腕力ニカヲ入レテクダサイ。私ノ計算ガ正シケレバ後数分デ開クハズデス…。」

ガノン・ファルコン「(0・5ってどんな力だよ。)」 心の中で突っ込み

リンク・ヨッシー「(それよりも、オリマーさんの言動が…カオスすぎてます。)」

…同時刻 現実世界 英の国 中央都市RZ 南方面 住宅街…

ネス「今度はあそこへ行ってみるか。リュカ、着いて来い…。」

リュカ「あっ！はい、先輩!!」

しかし…不吉なる「ナニカ」で、ようやく掴んだ光が一瞬の内に…

引き裂かれる絶望の間へと、変わっていくのを…

マルス達だけでなく、東西南北にいる戦士達は知らなかった…。

t  
o  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
s  
.  
.  
.

## Scene 6 The apostle of the purgatory

残酷描写があります。注意して閲覧してください。  
なお今回は戦闘メインかつマルス達が活躍します。

## Scene 6 The apostle of the purgatory

地獄の淵から這い上がりしモノ…

そのモノの名は「煉獄の喰人」

そのモノは一つの情報を支えて生きている…。

その一つの情報は生きるための糧…

楽園の者を全て

「喰らい尽くせ」このことだけだった。

…同時刻 現実世界 英の国 中央都市RZ 西方面 地下駅ステーション西道…

カサカサ…。

ウルフ「あん？」

マルス「…???何だ？」

あと数センチで横入りが出来そうぐらいなドアが開く寸前に、「小さき何かが蠢く」音が聞こえてきて、自然にと引っ張る手が止まる。

マルス「（何の音だ…？それに段々と…）」

ウルフ「（俺様達に向けて…近づいて来る…ぜ？？）」

いち早く音に気付いたウルフとマルスは、音がした方向へと顔を向ける。

フォックス「なあ…何か聞こえなかったか？？」

ファルコ「ああん？？気のせいじゃないか？？」

カサカサ…。

ファルコ「！！」

スネーク「…。」

またもや「何かが蠢く」音が聞こえてきて、ファルコは冗談めいた表情から真剣な表情へと変わる。

方向先は七車両以降…しかも段々とこちらに向かって「何かが蠢く」音が大きくなるのだ。

チャ…

自然にマルス達の手が、左腰・背中等に掛けられている武器を抜かないまま握る。どこから見ても臨整体制だ。

ロイ「（なあ…メタナイト殿に連絡した方がいいんじゃないか？？）」

「

アイク「（俺もそう思っていたのだが…どうも）」

ロイが小声で臨整体制を取っているアイクに声をかけるが…

スネーク「現実的にはうまくいかないものだ…」

思うように体が動かない…というべきか、簡単にできるはずの行動が全身でも凍りついたように、脳に送られる命令情報が遮られるように拒絶する。

長年の戦闘経験、身体の機能とは関係なく、それよりも別な仮想世界にない現実世界の「モノ」…

見たことも、感じたこともない…「アレ」に恐怖していたかもしれない。

グシャッ！！

一同「！？」

背後から何かが潰れた音が鳴り、マルス達は背後へと体を向けた途端…

？「ギ…………ギギ…………」

マルス「なっ！？」



ロイ「はあ！？なんだありや！？？む…虫！！！？？」

横転した列車の屋根に佇む物…普通はミクロサイズで見えない生物が「何か」で異常発達したかのように赤黒く変色し巨大化していた。

ヂ…ヂウジュ……ジュ…

マルス「（何の音だ？）」

スネーク「（何だか嫌な予感が俺の脳裏に過るんだが…）」

だがそのノミは、背を向けており何かを貪っている最中で、こちらには気づいてはいないようだ。

ウルフ「ああ！？蚤があんなにデカイのは見たことないぞ！？」

ファルコ「常識を覚えやがれ！って言いたいところだが…」

ウルフが常識さえ外れた言動に反応するかのように、列車の屋根にいたノミがゆっくりとマルス達に振り向く。

一同「っ！」

マルス達は振り向いたノミを見て、顔が蒼白になるほど啞然とした。

ノミの口にぶら下がる細長い物と、滴り落ちる液体…

無残な姿で骨を砕かれ、肉を喰い千切られ、原型すらとめていない人間の死体を口の中に頬張っていたのだから…

巨大化したノミ「ゴクッ…」

血と肉と肝を十分歯で嚼った後、口元に残っていた千切れた腕を飲み込み満足したような感じで腹の中へと押し込む。

ジュルッ…

巨大化したノミの瞳に、今だに硬直しているマルス達の姿が映る。巨大化したノミは口の中に漂う血が混じった唾液を舌で舐めまわすように、静かに音を立てた。

おそらく「ヤツ」の脳内に響き渡る命令情報はたった一つ…

マルス「今度の餌は…」

フォックス「ああ…まちがいなく、」

僕・俺らだ。

ボコッ！

マルス達は瞬時に今いた場所から散らばった時、列車の屋根にいた巨大ノミが全身を丸めて突進してきた。

先ほどの場所から滑るように数メートル離れていたマルスが、ノミが突進してきた箇所を見ると鉄で出来た線路が柔らかくなったよう

に凹み、更にコンクリートまで陥没していた。

マルス「（一度でもアレを受けたら終わるな…だが敵は一匹。）」

ファルコ「ただか体がデケエだけじゃ、俺らを捕まえないだろ？射撃の的にさせてもら…あ”！！？」

マルス「どうしたファルコ！？」

ファルコがブラスターを巨大ノミに構え余裕を言い放った時、突然ファルコの余裕の表情から何かに青ざめた表情へと変わる。

マルスはファルコに釣られて、ファルコが見ている方向へと顔を向けると…

？「ギチギチ…チ…。」

ロイ「うわああ！？う…蛆虫！？?!！」

アイク「それにしても大きいぞ！」

ゾゾゾ…

潰れた七車両の隙間から出てくる白い物…肉眼でも見れるぐらいに大きい「蛆虫」が複数現われる。

そこからだけでなく、排気管や排水管から異常発達した虫現れ、百足や蟻螂等が出てくる。

スネーク「…包囲されたな。」

マルス「…そうだね。」

虫軍団「ギギギギ…ギシ……。」

スネークが言った通りマルス達は、異常発達した大量の虫軍団に包囲されていた。

虫共の口元から滴り落ちる新鮮な肉を今すぐでも喰らいたい衝動を出す透明の液、生きた者を裂いた時に血が付いた爪・鎌を軽くコンクリートを引つ掻く音を立てる。

マルス達は音を立てないようにゆっくりと後退し、互いの背中を付け円形陣を取りながらそれぞれの武器を構える。

ウルフ「ちっ、見るからにして気色悪い奴らだな。数だけで俺様達を叩き潰せるとでも??」

フォックス「ん? やけに自信満々じゃないかウルフ。余程自慢ができる程の新しい業<sup>ワザ</sup>が出来たとでも??」

フォックスはウルフと背中合わせになりながら背後で銃を片手で投げ廻し、自信満々の表情を出すウルフを見て顔を後ろに向き目線だけで問い詰める。

ウルフ「毎日就寝前に隠れトレーニングやっててな…ようやく「ある技」の弱点を克服し、100パーセント完成した業なんだ。今度こそ貴様をブチのめすためによお!？」

フォックス「そう…。(俺の周りにいるライバルが段々と強くなっ

てきているな。（汗）じゃあ俺もアンタに負けないように頑張らないと。」

ファルコ「…援護はしておく。できる限り無茶すんじゃねえぞフォックス。（コイツも強くなってきたんだよな。まあここで張り合うつもりはないけど…。）」

カチンッ

ウルフの新技を期待しつつフォックスは、右手に持っている銃に左手でマガジン部分を引っ張って装填確認する。

ファルコもフォックスと同じように装填確認した後、ゆっくりと向かってくる敵に向けて銃口を構える。

スネーク「戦況を有利にするためにトラップを作る必要があるな。だからマルスよ…」

チャッ…

スネークはマルスの左腰に付いている神剣ファルシオンの鞘を見ると、閉まっている鯉口部分から少しばかりの光が漏れていた。

マルス「わかつている。僕らが奴らと闘っている隙に、スネーク君は得意分野を有効利用して脱出用の突破口を作る。そして…」

ザン！と、アイクの背中に携えていた大剣ラグネルの柄を掴んで、片腕だけで一刀両断したように剣を振り下ろしながら出し、空を切るような音を立てる。

アイク「速やかに生存者を救い、ここから離脱する…その後は、」

ボウンツ。

ロイの右腰に携えていた神剣の鯉口から紅蓮の炎が、本人の情に反応するように激しく燃え上がる。

ロイは左手で剣の柄を軽く握りしめ腰を落とし、段々と覆い尽くすように群がっていく虫共に向けて構える。

ロイ「マリオがいる『公民館』ってどこまで生存者ら含めて全員『オリジナルワールド  
想像世界』へと退避ってとこかな？」

マルス「そういうこと。やっと君も一国の軍師らしく考えるようになったね。（皮肉）」 本人は悪気なく言っただけ

ロイ「なった…って、お前…俺のことをなんだと思っただけだよ（怒）単純な熱血馬鹿だと思っただけかあ！??！（怒）」 ブチギレ5秒前

冷静な表情で皮肉めいた言動を言いながら、群がる敵に向けて臨制から戦闘体制を取ったマルスを見て、ロイは頭部にプッチンマークと、蒸気らしき物を出し表情は般若の形相を作りながらマルスに振り向く。

ファルコ「喧嘩なら他所でやれやナルシスト王子と赤毛馬鹿。それよりも…」

アイク「…来るぞ…！」

ドカツ！ドフツ！！

アイクが言った直後に囲んでいた虫達が、一瞬の内にしてマルス達がいる所へと雪崩れ込むように襲いかかる。

異常発達した蠍の鎌や顎に付いた鋏が、コンクリートを深く削つてマルス達の肉を内臓を引き裂き、赤い噴水を咲かす。

そして地を這いまわっている蛆虫が血を一瞬の内に吸い取り、分割された肉と飛び出した内臓は残りの虫共が喰らい尽くす。

虫達は当然のように貪り喰らうことができると、誰もが考えられただろう。相手が「ただの人間」ならば、

しかし…

マルス「…遅いよ。」

巨大化した蠍「！？」

ザクッ。

仕留めたと思った蠍の顔面に、左目から右顎まで刀身が食い込む。そして…

バシヤアアア！！！！

一瞬の内に蠍の顔面…否体ごと両断されて、断末魔さえあげられ

ないまま中身の臓器が勢いよく噴き出す。

紫の液体がスローモーションのように飛び散りながら、蠅螂の下半身からマルスが現れた。

どうやらマルスは巨大化した蠅螂の懷に飛び込んで最初の一撃を逃れつつ、弱点部分とされる所へとファルシオンの刀身を食い込んでそのまま反撃したようだった。

マルス「相手が『普通の人間』だったら殺れたと思うよ。普通ならね…。」

紫の液体がマルスの全身を逸らすように雨のように飛び散る。マルスは一体目を殺った蠅螂の死骸を見ずに、そのままには次なる標的へと変える。

困っていた虫共「ギギ…シヤアアア…!!!」

困っていた虫達がマルスによって斬り斃された仲間の蠅螂の死体を見て、死に物狂いのような勢いでマルスに跳びかかるが…

マルス「ったく、もう…だから…」

困っていた虫共「ギッ!!」

ゴッ…

包囲の中心にいたマルスの姿がいつのまにか消えており、虫達は法則状目の前にいた仲間の虫の頭部へとぶつかる。



見えないスピードで飛びかかる虫達の猛攻を、風のように舞いながら全て避けて、マルスの体は自分を囲っていた虫達から数メートル離れていた。

マルス「数で畳み掛ける君達では、こんな小さい僕を捕まえられないらしいね。それで僕を倒すことが出来るのかい??」

囲っていた虫共「!???!」

ズルツ…

突然虫達の手足に小さい線が走る。その線が段々と広がっていき肉が斜めへとずれていく。

マルス「僅かな時間さえあれば、僕は一方的に攻撃できるけど…まあ、相手が悪かったと言っておくとするか。」

ブシャアアアアツ!!

一瞬の内に虫達の手足だけでなく全身が細かく分解され、大量の紫の液体が舞い散る桜のように咲かせる。

絶命すらあげられないまま床に溜まっていた自らの紫の液へと、細切れになった肉片がスローモーションのように落ちていく。

アイク「ふんっ!!」

ロイ「いいいやああ!!!!」

ポウンッ!!

虫共「ギイイイイイ！！！！」

炎を宿した神剣「ラグネル」・「封印の剣」の刀身を、思いっきり一刀両断ごとくコンクリートに向けて振り下ろす。

剣ごとコンクリートへ突き刺した時凄まじい熱気と爆炎が生まれ、コンクリートの中にあつた鉄ごと溶けだし液体へと変わり果てる。その中から百熱の炎が生まれ本人の意思があるように、自分達を喰らおうとする周りの虫達だけ焼き尽くしていく。

ジュウウウウ…

虫達の肉がズルリと焼け落ち、中の内臓までも全て焦げたような匂いがマルス達に襲いかかる。

マルス「ちょっと…火加減してくれないかい？こんな悪臭を僕の身に付けたくないだけだ。」

ロイ「へへへ、わりいわりい！ついつい力入れちゃって！！まあアントナの場合は、虫肉の香水でもかまわないじゃないの??」

マルス「…なるほど、君は僕に斬り斃されたいようだねえそれ。（怒）」

マルスはニカッと少年のように笑うロイを見て、先ほど仕留めた後鞘に収めたファルシオンの鯉口を切って表情は般若の形相のまま睨みつける。

ロイに対してのマルスの怒りを白目にアイクは、真剣な表情のまま

で焼き尽くした虫共の死体を見つめる。

アイク「…加減はできん。俺は最初から本気で殺るつもりだ。（拒否）…腹減ってきたので虫の焼き肉を喰いたい。（ボソツ）」

フォックス「え」…？…：…なんか…物凄いことを聞いちゃったけど（汗）…まあ気にしないさ。」

フォックスがアイクの言動に少しツツコミながらも、目の前に立ちふさがる虫達に向けて突進する。

虫共「ギシャアアアア！！！」

フォックス「おいおい、一か所に固まらなくて四方へと避けたほうがいいぞ。まつそんなことを言っても…」

フォックスが半分呆れた表情で言いながら、群がる虫達の中へ突撃する。

目の前に覆い尽くすぐらいの虫達が牙を出し、普通ならフォックスの肉を食い込んで引き千切る感触を味わいながら喰らい尽くすのだが…

虫共「！？？？！！」

目の前にいた獲物の姿が無く、標的は虫共の数メートル後方に立っていた。

フォックス「…動かないほうがいい。無残な死を味わいたくないのならって…」

ズルッ…

虫共「ギイイ！！！！！！！！！！」

フォックスの警告すら聞く耳持たないで虫共が振り返ると、所々の体に複数の線が走って除所にずれていく。

フォックス「別にアンタらに言ってもわからないか。」

ドシャアアアア！！！！！！

そう言った直後に虫達の体が細かく分割され、勢いよく紫の血が噴き出し切り裂かれた虫の肉片が零れ落ちる。

シャアアアア…

血飛沫と肉片が飛び交う中、肉眼でも見える青白い幻影がフォックスに向けて走って来た。

ファルコ「へっ…『改・フォックスイリュージョン』か。相変わらず手際いいってことで。」

シュウウ…

幻影でできたフォックスの残像が、本体の中に吸い込まれていくように入っていった。

本来「フォックスイリュージョン」は本体の後を付いていく欠点があり、超高速で走る本体と幻影は鋭い斬撃となって単体の敵を攻撃

するような物。

だが今やった「フォックスイリュージョン」は、幻影自体が意思でも持っているかのように複数の敵の骨を砕き、肉を引き裂いて攻撃をしていた。

意思を持った幻影を保つためには、本体の強い精神力と集中力と脚速の強化が必要となるため、通常ならではの普通の身体だと本体そのものが破壊されてしまう可能性がある。

フォックス「手際いいって…ファルコ、お前もそうじゃないか。」

ファルコ「テメーは一瞬で殺ったじゃねーか。テメーのせいであと0・25秒の差が開いちまったんだが。」

フォックス「いちいち戦闘経過時間に、小数点単位を付けなくてもいいのに（汗）」

フォックスは呆れた表情で半分キレているファルコを見て言った後、次なる敵へと走り出す。

ファルコ「（まだ弾数とマガジンを見る限り余裕があるな。なんだか弾薬がもったいないので、とりあえず俺の身体でも動かすとするか。）」

ガチンッ！

ファルコも装填動作リロードをやった後、フォックスの後ろへと付くように後を追いかけていく。

フォックス「（普通なら銃声ぐらい聞こえるんだが…）」

フォックスは先ほどいたファルコの足元を少しだけ見た時、頭部の無い虫共の死体が無残にも転がっていた。

銃口を見ても、サイレンサー銃声遮断装備さえも付けていなかった。

予感ではあるがフォックスは脳裏で思ったことは、先ほどの戦闘が始まった時に彼は虫共の攻撃を避けた直後、彼は真つ先にマルスの剣が虫の頭部に組み込む前よりも早く、虫共の頭部にめがけて撃つただ。

全員が地面へと付く音と虫共の体がぶつかる音で銃声をかき消し、さらに殺った直後の虫共の断末魔で第二の銃声すらかき消し、その繰り返しを行っただけで殲滅させたのだと思った。

フォックス「（十八番の早撃ちね…もはや銃に関しては上級暗殺者並だなファルコ。）」

ブチュッ！ブチャッ！！ブチッ！！！！

天井の電灯に引き裂かれた虫共の内臓の一部がぶつかり、纏わりついていた紫の液体が天井の壁を紫色へと汚していく。

ウルフ「ハンッ！？この程度かよ、弱すぎるぜ。」

ドシャッ！ップ！

右手に掴んでいた虫の頭部を投げ捨てて左足で頭部を踏み潰した後、退屈そうな表情で潰れた虫の頭部に唾を掛ける。

虫共「ギ…ギギ。」

ウルフ「折角の新技术をお前らに試してみたかったんだが…」

鋭い爪が反射で光りそこに映るウルフの表情は、雑魚相手を詰まらない目で見下していたような表情を出していた。

ウルフ「弱すぎる奴には勿体無ねえ、素手だけで倒してやらあ。ただし…」

覚悟を決めたのかボロボロの両翼を持つ大きな蛾が、一直線にウルフへと目がけて突進する。

ウルフ「ハンデとして、『利き腕』は使わないでおくぜ？クソ雑魚共。」

グシャッ！

ウルフの足元に原形すら留めていない蛾の死体が、ピクピクと痙攣しつつ気色悪い液体を零しながら転がっていた。

どうやら一瞬の内に利き腕ではない左手で蛾の頭部を掴んで、爪を頭部の中にある脳まで深く突き刺しながら、思いっきり足元に向けて叩きつけたようだ。

死にかけの蛾「ギ…ギイ……。」

体全体がグチャグチャにつぶれ内蔵類が床にブチまけながらも、頭部が潰れた蛾は無駄に足掻こうと必至で動かそうとするが…

ウルフ「つまんねえことすんなよ、さっさと逝っちまいなクソが！  
」

死にかけの蛾「ギッ！！」

グチュッ！！ジュジュジュジュ！！！！

ウルフの左足で蛾の頭部を踏み潰し、完全に息の根を止める。

それでも飽き足らず左腰に納めていた銃を取り出して、蛾の体全体に向けて銃弾を撃ち抜き、跡形も無くなるまで撃ち続けた。

フォックス「おいおいおいおい（汗）：ウルフやりすぎだつて。」

ザンツ

フォックスは呆れた表情で、先ほどの意思ある幻影攻撃で虫共の肉を引き裂きながら、すでに死体と化した物体に好き勝手に壊すウルフに向けて言う。

ウルフ「うるせえなフォックス。対外弱り切った獲物は逃してしま  
うと後後面倒になる。労力を無駄なく行う場合はこのようにメツタ  
メタにして容赦なく完全に動かなくなる（死ぬ）までぶっ殺すんだ  
よ。それは俺らの世界とでも同じようなもんだろ？」

ザコッ！

フォックス「まっ、アンタが言っていることは間違えじゃないけど  
：さあ、これは酷いやり方だね。挑んだ敵：本当に可哀想。」



ザシュッ

ウルフ「あぁん？テメーも容赦なく殺っているくせにそんなこと言えるのかよお。俺様の好敵手<sup>ライバル</sup>？？」

グチャッ

フォックス「いやいやいやいや、俺は技功派なんでね。悪いけど倒し方はアンタと同じじゃないからさ。」

ドスッ

ファルコ「（いやいやいや…同じだと思うけど。今ここで俺が突っ込んでいたら「何かされそう」だし…空気読んでおこ（汗）」

ファルコは今だに群がる虫共を片腕だけでどんどん屠るウルフと、幻影で引き裂き手にする銃で敵の急所を撃ち抜くフォックスを呆れた表情で見て、次々と殺りながら論議をするウルフとフォックスに向けて心の中で空気を読んでいた。

巨大百足「ギャッ！！」

マルス「（そんなに大したことはないとは言っても…）」

ザシュッ…ヒュン。

マルスは巨大な百足の首を切り落とし、刀身に付いた紫の液体を振り払って、次なる標的へと定めながら腰を落とし斬りかかる。

マルス「（数が多すぎる…早めにやらないと僕らが逆に喰われる側になる。それよりも…）」

ザザザザ…

排気口等の隙間から溢れる様にどんどん虫共が次から次へと湧いてくる。斬り伏せていく度に数が増えてきているような感じもする。

マルスは的確に急所の部分へと刀身を食い込み、テンポよく斬り斃しながら地上にいる仲間達の現状を推測する。

マルス「（このような惨事が起きているのは僕らだけではないハズ…もしかしたら地上も…）」

隙を見て刀身に付いた液体を振り払い、巨大団子虫の腹に剣先を食い込んで一気に横へと伸ばすように斬り伏せる。

ゴポッ

所々へと零れ落ちる臓器と紫の液体…その紫の液体は、錆びた線路の上に広がりながら隅にある空気講へと入っていく。

ザザザ…

その空気講の中に、孵ったばかりの蛆のような幼虫が溢れていた。その幼虫の口に死した虫の血が入り込み、満腹感を覚えるまで跡形もなく吸い尽くす。

グチャリ…

それでも飽き足らず、たまたま近くにいた蛆のような幼虫の肉を噛みつき、新しい満腹感を味わう。

そしてその隣にいた蛆みたいな幼虫も、子供を喰った幼虫の肉を噛みつき、喰らう。それに釣られて幼虫も、その繰り返しで、もう流れてくる血を飽きて隣同士の幼虫の肉を喰らい尽くしていく。

グブッ

お互い肉を喰らいあつて数万体の幼虫の中の一匹が、最後の幼虫の肉を喰らつて飲み込み生き残った。

残された一匹が唯一の強者となり残った物の腹の中には、つい先ほど喰らいあつていた仲間の肉が体内を動き回り消化されている。

ギチ…

残されたモノの体が、時間を掛けて徐々に大きくなる。

体内に張る細胞が捕食した遺伝子を取り込み、所々分裂しながら増殖して異常に活性化する。

” 生きるモノ全てヲ喰らい尽くせ。”

脳に送られてくる情報はそれだけであり、先ほど喰らい尽くした幼虫の血肉では満腹感を満たさず、今だに首から口に通して飢餓感が過る。

ボコッ

弱弱しかった白い体が徐々に外部を覆い尽くすように硬くなり、腹の辺りから腕が生えて指先から爪を伸ばし、口から人間のような歯が生えてくる。

”喰ライ尽クセ”

そのモノはマルス達がいる「地上」へと顔を上げて、今だに成長し続ける身を伸ばし爪を壁に食い込みながら這い上がっていった。

t o b e c o n t i n u e s . . .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2650e/>

---

サヨナラ ...永遠の約束...

2010年10月8日13時38分発行